

## 《論 文》

## “Reflexivity” 概念と福祉社会学研究

渡 邊 益 男

## 目 次

はじめに

- (1) Reflexivity 概念の分類と社会学的 Reflexivity 概念の位置づけの問題
- (2) エスノメソドロジーにおけるラディカル・リフレクシヴィティ概念をめぐる問題
- (3) 社会学における Reflexivity 概念の発展
  - 1) アルヴィン・グルドナーの社会学における Reflexivity 概念
  - 2) 「再帰的近代化論」における Reflexivity 概念
    - (a) アンソニー・ギデンズの Reflexivity 概念
    - (b) ウルリヒ・ベックの「リスク社会論」における Reflexivity 概念
    - (c) スコット・ラッシュの Reflexivity 概念
  - 3) ピエール・ブルデューの Reflexive Sociology における Reflexivity 概念
- (4) 人間社会の全体的に Reflexive な構造連関と福祉社会学研究の課題

おわりに

(注)

## はじめに

いま、わが国の社会福祉は「社会福祉の基礎構造改革」によって大きく様変わりしつつあり、いわゆる「社会福祉のパラダイム転換」が起こりつつあるように思われる。それが利用者中心で自己決定による自由な契約と選択の自由が保証され、自立が尊重され、福祉活動が自立支援活動となった限りでは、批判の余地はないかに見える。しかし、他方で、ここでも「構造改革」は痛みを伴い、しかもその痛みは貧困者、低所得者等、最も弱い立場におかれた人達に大きく皺寄せされ、まさに「悲惨」な状況に追いやられている人たちの現実も存在している。こうし

た状況は、次のようにいうこともできよう。

一方においては、社会福祉の現実の政策・制度・実践の総体としての福祉の「構造」は、大多数の人々によって承認され支持されて成立しているものであり、その人々の意識は、その「構造」の中で育まれ、また、それによって益々強固にされ、そうした意識が益々「構造」を強固に支えるという循環過程の中にある。しかし、他方においては、そのような「構造」の中で、その「構造」に規定されながら、その「構造」の孕む矛盾を一身に背負われつつ、自らの実践感覚に基づきながら〈実践領域〉における生きた現実を生き抜いている人々は、出口の見えない「構造」の力に圧倒されながら、生活の苦

しみに呷吟しつつ耐えている。その相対的貧困と相対的な苦しみは益々深くなっていく。今や福祉の対象は、一部の人々のみではなく、国民一般であると説かれる中では、その一部の人々の生活の相対的剥奪感がなくされているわけではないから、こうした相対的な苦しみの深まりは避けられないのである。

このような、全般的な福祉の現状は、一般的に福祉と思われるものは社会的承認を得てはいるが、実は誤認なのではないか、そこには、誤認＝承認という支配の論理が働いている証拠ではないか、という疑問を抱かせるに十分なものがあるように思われる。

こうした問題を抱えながらも、現実の福祉はあくまでも社会の中の一つの機能であるから、社会のあり方を基本的に規定している政治や経済の枠の中でしか存在しえない。したがって、福祉の世界の論理は、政治や経済の世界を支配している論理によって、多かれ少なかれ形作られている。そのため、地方分権化や民間活力の応用はよいとしても、市場原理の導入は、これまで営利事業は許されないとしてきた福祉の世界に、競争原理とともに営利事業の参入を許し、福祉の観念を根本的に変えてしまいかねない状況となっているのである。ひとたび堰を開ければ、怒濤の如く流れる川の流れのように、利潤動機の力は福祉の世界を浸食していくことは必定であり、現に、その奔流の犠牲者も出はじめている。

眼を世界に転じて見れば、今日では批判のいかに問わず、グローバリゼーションは不可避免的に進行しており、もはや国民国家の時代は重大な局面にさしかかっているといわなければならない。人類全体が乗り合わせている超大型トラック「ジャガーノート」は、平原を超スピードで突っ走っているが、その先には断崖絶壁が待ちかまえている。これは、A. ギデンズの社

会理論を論じた本の表紙の絵である<sup>1)</sup>。それは、「世界はどこへ行くのか」を問い、警告を発し、その危機の認識とその危機を回避せんとする社会学理論の展開である。

グローバリゼーションの進行している現代では、最広義の福祉は、まさに人類社会の幸福＝福祉でなければならない。人類的な危機が決して遠い夢物語ではなく、一つの最も重大な危機として現実味を帯びた可能性として立ち現れるようになったことは、ギデンズの理論では、グローバル化と共に「近代」の経済的、政治的、軍事的および環境的な「制度特性」の帰結の一つなのであるからである。

このように、身近な地域から人類社会に至るまでの矛盾に満ち、危機と背中合わせて進行している事態の中で、一体、福祉とはどう捉えるべきであろうか。また、福祉研究はいかになされるべきであろうか。いわば現実の福祉の「構造」ともう一つの福祉の〈構造〉との狭間にあって、この両者といかにかかわり、また、いかに自らの福祉実践をしながら生きていくべきかが問われているのである。福祉に関する限り、理論は実践から離れては成り立たないからである。

さて、以上みてきた福祉をめぐる地域、社会、人類社会の問題、さらには福祉研究ならびに研究者のあり方の問題、これらすべての問題を解く鍵は、本論文で課題に掲げた reflexivity<sup>2)</sup>にあるように思われてならないのである。reflexivity は、これまで主要には「反省性」又は「再帰性」と訳されるか、そのまま「リフレクシヴィティ」として使われてきたが、細かにみれば、その意味内容は様々である。

人々の〈実践領域〉における生きた生活の営みの中にすでに reflexivity が存在しているために、それと遊離した政策、制度、実践は、たとえ福祉と一般的にいわれようとも、その問題性は否応なく明らかにされていく。それをより

明確にし、その解決の方途を指し示すことのできるのは reflexive な研究であるが、そのような研究は研究者の reflexivity に対する認識と自己自身の reflexive な態度にかかっていると思われる。

社会の様々なレベルにおいても reflexivity は作用しており、その結果として、それぞれのレベルにおける問題とその解決をめぐる戦略・闘争が展開され、社会のダイナミズムがある。その最も大きなレベルで、人類社会、世界の問題とその帰趨が問われる。再帰的近代化論が主張されるゆえんであるわけである。

本論文では、社会学における reflexivity 概念を再検討するとともに、その方法が福祉社会学研究に対してもつ意味を明らかにしていきたいと思う。

#### (1) Reflexivity 概念の分類と社会的 Reflexivity 概念の位置づけの問題

さしあたり、筆者の関心の中心にあるのはブルデュー社会学における reflexivity 概念と、ギデンズ、ベック、ラッシュの『再帰的近代化』理論における reflexivity 概念の接合にある。しかし、社会学における reflexivity 概念は、少なくともグルドナーの「自己反省の社会学」やガーフィンケルの「エスノメソドロジー」における reflexivity 概念にまで溯ってみなければならない。

しかし、それに先立って、社会学の領域外においても、様々な意味で、reflexivity 概念は使われてきたし、広い意味では、社会学においてもデュルケームの社会学やマンハイムの知識社会学、マートンの機能主義社会学とも深く関係していたと解釈されてもきた。したがって、reflexivity 概念全体の展開過程の中で上記の焦点とする社会的 reflexivity 概念の位置を確認するために、reflexivity 概念の分類から

みていきたい。

多くの人達に参照される M. リンチの分類によれば、reflexivity 概念は次のように大きく 6 つに分類されるという (Lynch, M., 2000)。

##### (1) 機械論的 Reflexivity

フィードバックを含む一種の回帰的過程のことで、自然過程や社会過程の機械論的説明に入ってくるもの。

##### (1a) 反射的 (knee-jerk) reflexivity

習慣的とか無思慮とか瞬間的な反応を指し、意識的な内省 (reflection) は除かれる。

##### (1b) サイバネティックなループ

サーモスタットのようなフィードバックループを含む回帰過程又は回帰パターン。人間的な意味では相互作用過程のレベルで自己自身の行為を慎重に意識的にモニターする能力としての自己省察 (self-reflection) が強調される。

##### (1c) 無限の反映 (reflection ad infinitum)

鏡の間やメビウスの輪やエッシャーの手のように、反映に対する反映の無限の回帰。

##### (2) 実質的 Reflexivity

社会世界の現実的な現象として扱われる reflexivity。グローバルな社会システムのレベルでは近年のモダニティの特徴を指し、对人的相互行為のレベルでは人間的なコミュニケーション的行為の基本的な特性を指す。

##### (2a) 体系的 reflexivity

近年のモダニティにおける組織原理として用いられるもの (A. Giddens, U. Beck, S. Lash, Y. Ezrahi)。(1b) の相互作用過程や (5b) の解釈学的循環より、もっと大きな歴史的・文化的段階で作動する reflexivity で、その最も大きなものは「再帰的近代化」である。

##### (2b) reflexive な社会的構成

動機づけ行為や解釈の中にある自己省察

(self-reflection) によって相互主観的なものが社会的現実(の秩序)を構成するが、その相互主観的な社会的現実自体が reflexive な同意によって存続されるという関係をさす。

### (3) 方法論的 Reflexivity

哲学や現代社会科学の方法論における reflexivity

#### (3a) 哲学的な自己省察 (self-reflection)

哲蒙主義の自覚の観念。自己自身の信念や仮説に対する哲学的内省 (introspection) や自己批判。

#### (3b) 方法論的自己意識 (self-consciousness)

参与観察で観察者自身が対象となっている集団と自己自身との関係を考慮するときの reflexivity。自己の仮説や偏向の可能性などに焦点がおかれる。

#### (3c) 方法論的自己批判 (self-criticism)

自己意識から自然に自己批判に変わったもので、言説分析やテキスト批判の反客観主義の形を取る場合(反実証主義、懐疑主義)

#### (3d) 方法論的自己賞賛 (self-congratulation)

自然科学の成熟性と同じインデックスを社会科学に適用した科学社会学における reflexivity (Merton)。

### (4) メタ理論的 Reflexivity

方法論的 reflexivity ときわめて類似しているが、さらに一般的な reflexive な方向性、展望、態度をもったもの。

#### (4a) reflexive な客観化

退くこと (stepping back) は、完全に位置が固定化しているメンバーが当然の如く“客観的”であると見做しているものを見抜き、批判的に再評価する力を意味している場合は超客観主義である。P. ブルデューの reflexivity がそのよい例。ブルデューは、

reflexivity を社会的界(場)の客観化と同一視している。その主観をすでに客観化している社会学という界に reflexive な光が当てられると、二重の客観化が起こる。

#### (4b) 観点 reflexivity

現代の批判的理論の一つであって、支配的なディスコースに対する reflexive な批判の存在条件を提供するジェンダー的、民族的、文化的「立場」を重視するもの。最も不利な状態におかれた人々の生活との存在論的同一化、方法論の一体化をめざし、批判的内省を含みつつ、認識論的な力を持つ reflexivity 概念である。

#### (4c) フレーム破壊

モダンなフィルムや劇場や絵画の幻想的テクニックを、日常生活の世俗的状况を取り囲んでいる劇場的フレームのアイデアに拡張したもの (Goffman) で、現象学的フレームづくりと reflexive なフレーム摘発をさしている。

### (5) 解釈的 (Interpretative) Reflexivity

解釈すなわち、対象となるものまたはテキストを読むこと、考えること、熟考すること、意味づけることなどと同一視される reflexivity。

#### (5a) 解釈学的 (hermeneutic) reflexivity

自然的対象とそれへの作用との、社会的主体同士の間、また、社会科学的解釈と日常的解釈との間の、二つの解釈秩序を区別する「二重の解釈学」(Giddens) による社会的構成を理論化する方法を指す。

#### (5b) ラディカル・リファレンシャル・リフレクシヴィティ (radical referential reflexivity)

自然的解釈と社会的解釈とを共に含めることによって、また、社会科学的発見に「特権化された」あるいは「客観的」な地位を与え

るようなレトリカルな又は方法論的な戦略を許すことを拒否することによってラディカル化したもの。ブルデューの reflexive sociology とは異なって、客観化の実践そのものを問題視する。つまり、ローカルな意味から離れ、独立した世界を指したり、前提とするようないかなる表象に対しても懐疑的である。

#### (6) エスノメソドロジ的 Reflexivity

ガーフィンケルのエスノメソドロジー・プログラムに発する reflexivity。アカウントの reflexivity は解釈—意味することを表現し、指示し、承認すること—を意味するが、それ以上に人々がひとりでまた共同して、過去を振り返って、また、将来を見通して、「アカウントブルな」(説明可能な) 事態を産出する具体化の実践を意味する。理論的、実質的、方法論的な reflexivity のすべてが顕著に混在している reflexivity 概念である。

以上のように、reflexivity 概念は、哲学、社会科学の領域で実に様々な意味内容をもって広く使われてきたものであった。その錯綜している全体を、リンチは大変見事に分類してくれているといえるわけである。しかし、筆者の関心からすれば、社会学理論のなかで、とくに、グルドナーやギデンズ・ベック・ラッシュやブルデューの理論における reflexivity の位置づけに対してはいささか疑問を感じざるをえない。そこで、これらの社会学理論との関係で、リンチの分類から得られる意義とその問題点を確認しておきたい。

まず第一に、いずれの reflexivity 概念にも殆ど共通している性格は、人間の行為と社会のあり方にかかわって、回帰過程を指していることである。したがって日本語訳としては「再帰性」が望ましいように思われる。ただ、何が再帰し、どのように再帰するとみるかは論者によって異なっているわけである。

第二に、リンチの分類で顕著なことは、大きく、実質的な reflexivity と理論的又は方法論的 reflexivity、およびその両者の複合に分けられることである。ただし、機械論的 reflexivity は別である。しかし、ギデンズ等の概念やブルデューの概念の位置づけは曖昧である。ギデンズの概念は実質的 reflexivity の中の (2a) 体系的 reflexivity であると同時に、理論的な reflexivity の中の (5a) 解釈学的 reflexivity として位置づけられているのに対して、ブルデューの概念はメタ理論的 reflexivity ((4a) reflexive な客観化) にのみ位置づけられているのである。ギデンズとベックとラッシュ三者の間の概念の違いは、三者それぞれの現代を捉える理論的立場や方法的立場の違いからくと思われるが、その点がリンチの分類では考慮されていない。

第三に、ガーフィンケルに始められたエスノメソドロジーにおける reflexivity が、その後のエスノメソドロジー研究の中でどのように継承あるいは批判されて発展したかが明らかになる分類にはなっていないことである。この点はきわめて重要と思われるので、項を改めて次に論じていってみることとしたい。

第四に、とくに A. グルドナーの reflexivity が位置づけられていないことである。少なくともブルデューやギデンズ等の社会学における reflexivity 概念の形成に対して、グルドナーの社会学の影響力はきわめて大きいものがあったと思われるからである。

#### (2) エスノメソドロジーにおけるラディカル・リフレクシヴィティ概念をめぐる問題

ガーフィンケルの提唱したエスノメソドロジーにおけるリフレクシヴィティ概念がその後のエスノメソドロジー研究の中で継承発展させられる過程で出現した「ラディカル・リフレクシヴィ

ティ」のもつ意味とその解釈をめぐる展開された研究者間の論争は、筆者のリフレクシヴィティ概念追究の観点にとっては、極めて重要な意味をもつもののように思われる。そこで、次に、この「ラディカル・リフレクシヴィティ」をめぐる問題についてみておきたい。

ガーフィンケルのエスノメソドロジーに込められていたリフレクシヴィティが、今日のエスノメソドロジー研究においては、その重要な側面が脱落していることを指摘し、警鐘を鳴らしたメルヴィン・ポルナーは、エスノメソドロジーにおけるリフレクシヴィティ概念の発展をめぐる論点を整理してみせてくれている。そのエッセンスは、既に多くの人に注目されてきたが、筆者のみるところ、重要な点は次の諸点にある。(Pollner, M., 1991)。

第一に、初期のエスノメソドロジーにおけるリフレクシヴィティには、内生的 (endogenous) リフレクシヴィティとリファレンシャル (referential)・リフレクシヴィティがあり、後者はラディカル化されていき、「ラディカル・リフレクシヴィティ」といわれるものになったということである。

内生的リフレクシヴィティとは、「社会的リアリティの中で、そのリアリティに対して、また、そのリアリティについて、メンバーが行うことがいかに社会的リアリティを構成するものであるかをいうのである。言語も行為も既存のリアリティに対する反応であるだけでなく、そのリアリティの構成に寄与しているのである。同様に、メンバーの状況場面についての知識や記述は、その組織の構成特性としてその元の場面に立ち戻る (turn back) のである。—これがリフレクシヴィティのもともとの意味なのだが—」(ibid. p.372) とされている。これに対して、リファレンシャル・リフレクシヴィティは、「あらゆる分析—エスノメソドロジーを含

む—は構成過程であると考えるのである。メンバーだけが説明可能な状況場面の内生的構成に含められるのではなくて、アナリストも含められると考えるのである。エスノメソドロジーはそれ自身の分析を構成的で内生的な達成であると評価する限り、それはリファレンシャルにリフレクティブである。この構成に対するリファレンシャルにリフレクティブな評価は、その評価者がリフレクシヴィティの範囲内にあるときラディカル化されるのである」(ibid. p.372) と説明されているのである。

第二に、この二つのリフレクシヴィティはどちらもガーフィンケルのエスノメソドロジーの方法に含まれており、初期のプログラムではラディカル・リフレクシヴィティの方が重要で中心的とみられていたのであるが、リファレンシャル・リフレクシヴィティのさらなるラディカル化とともに、それは次第に衰退し、代わって会話分析を主とする内生的リフレクシヴィティが支配的になっていったことである。このラディカルなものが落とされ (leave out) ていった理由として、①自然的な右傾化のゆがみ、②左翼への動きはばからしいと思われること、③規律の嫌悪、の三点が指摘されている (ibid. pp.374~375) ことも合わせて注目しておかねばならない。

第三は、ラディカル・リフレクシヴィティの結果を探究するためにラディカル・リフレクション (radical reflection) とラディカル・リフレクシヴィティ (radical reflexivity) の区別の意味が明らかにされていることである。この区別はきわめて重要であるので、少し立ち入ってみておきたい。

まず、radical reflection (省察又は内省) については、ポルナーによれば、「ラディカルにリフレクティブな探究は、それ自体を人間行動を構成する過程や実践に満ち満ちている人間

行動の一つの形式として探求するもので、既存の概念的、経験的資源に従って分析されるべき新しい分野を開くのである。エスノメソドロジ的な省察的探求は、例えば“indexicality”（インデキシカリティ＝指示的諸特徴）とか“practices”（実践）とか“achievement”（達成）といったようなエスノメソドロジ的現象がアカウンタブル（説明可能）に構成されるという内生的で間テキスト的および相互作用的な過程を、特有なエスノメソドロジ的無関心をもって取り扱うということになる。」（ibid. p.375）と説明されている。

これに対して、radical reflexive（再帰的又は反省的）な探求は、reflective（省察的）な探求が特定のプロジェクト以前の仮定や実践を取り巻く場所（arena）の範囲内で起こるものだということを認める」（ibid. p.376）というのである。このことは、reflection（省察）は既成の枠の内部での反省的行為であるのに対して、reflexivityはその枠を問題にすることを意味している。ボルナーは次のように説明している。「省察的分析は、省察や研究による記述や説明を素直に受け入れるような実践から成っていると既に認識されている領域の内部で展開するのである。省察の隠喩は、特定の世界に含まれているものを鏡に映してみせようとするのに似ている。かくて、省察それ自体は、それと関係している関心の領域全般と同様、実践と過程の枠によって形成されまた制限されるのである」（ibid. p.376）と。そして、さらに、「言説や実践の場の後壁に追い詰められて、エスノメソドロジストは、（リアリティにかかわる他の専門領域の実践家と同様）自分の領域の中核を構成している「ものごと」（“things”）—構造、実践、過程—に誘惑され、またその方へ向かっていく。この世界を占めている研究の凝視から逃れさせるものは、枠をつくり、それによって

内部にこのような光景やその観察者が存在する場所をつくる存在論的实践である。」（ibid. p.376）とされている。エスノメソドロジの焦点は所与の諸関係と諸行為が何かということ、どのようにしてということにかかわる内部の枠におかれるのである。たとえば、臨床的な相互作用分析はクリニック、診断、医師、患者を前提にしており、それらが達成する実践を検討するのである。しかし、この枠についてのリフレクシヴな研究は、ある活動の「それ」すなわち、その内部で特定の実践が展開される言説的、制度的空間を構成する過程を問題にするものであることが注記されているのである。

最後に、ラディカル・リフレクシヴィティとポスト構造主義者の方法との類似性について指摘されていることである。つまり、この枠に向かう運動はDerridaやFoucaultやRotyの場合も同様であって、彼らのいう“主体”、“対象”、“知識”とこのラディカル・リフレクシヴな研究は共鳴するところがあるとされており、ガーフィンケルの破棄手続（breaching procedure）がそうであって、その裂け目をつくるということは、日常生活の中で「見えるけれども気づかれていない」実践や過程を明るみに出し、「緩慢な想像力の助け」となるものだということを述べているのである<sup>3)</sup>（ibid. p.376）。

なお、この他に、ボルナーは以下のように重要な点も指摘している（ibid. pp.377～379参照）ので、補足的に述べておきたい。

① リフレクシヴな研究は、普通の研究の自己満足と気づかれなさを攪乱し、あるいは破壊すらするのに必要なものであるが、社会学の内部では「アブノーマルなディスコース」であること、このラディカル・リフレクシヴィティによる理不尽さや転覆性は、日常実践についてのガーフィンケルの破棄手続の結果と類似性があること、しかし、ラディカル・リフレクシ

ヴィティを支えているパラドックスや背反や矛盾は、発見であり、リソースであるとともに、一層の探求のためのインセンティブであることである。

② しかし、ラディカル・リフレクシヴィティは、固定化された領分を越え、固定化された共同体の境界を越えて冒険し、世俗的な仮説(mundane assumption)を侵犯し、あるいは浮遊させるように試み、主体／対象の二元性を越えて探求しようと努力する。しかし、次には、固定化された存在論的空間のうちでその起源も意味も組織化も精練されるような新しい現象や偶然性とともに知的共同体に帰ってくるのであり、世俗的デスコースの問題性に関する洞察をもって固定化された共同体のところへ帰ってくるのであって、元の軌道の中へと引き戻されてくるのである<sup>4)</sup>。

③ この回帰過程は、純粹にリフレクシヴな観点からみれば、「限界」であるが、枠との関係を重視する観点からみれば、本質的なダイナミックスなのであって、日常的文脈と科学的な文脈との双方の当然視されてきた構造の新しいレベルが築かれるのである。

④ ラディカル・リフレクシヴィティは、それ自身のダイナミックスに身をまかせつつ、無限に不安定なままであるだろう。しかし、それが分析用具として用いられると、深い新しい実践レベルに足がかりを提供するし、たとえ、観点のない、根拠のない、転覆的なものであらうとも、認識論的に固定化された知的共同体に対して、観点が作られ、根拠が確立され、転覆に對抗するリアリティが確保される作業を引き渡すのである。

かくて、エスノメソドロジーは、リフレクシヴな認識論と世俗的な認識論の間を揺れ動くのだとボルナーは結論づけるとともに、ラディカル・リフレクシヴィティが社会学の他の領域の

研究と深く共鳴し合いながら、偶然的で社会＝歴史的構成としてのリアリティ解明のために果たす役割を説くのである。

以上みてきたボルナーのラディカル・リフレクシヴィティの意味と意義についてはエスノメソドロジストの間で激しく議論されてきた。肯定的な論の中で注目すべき点は、まず兼子<sup>1)</sup>は、内生的リフレクシヴィティとリファレンシャル・リフレクシヴィティは二つの位相に分けたものであるとし(兼子、1995: 1998)、後者はエスノメソドロジー研究をする成員がリフレクシヴな特徴に言及するアカウント実践に含まれているリフレクシヴな特徴を指し、それをラディカルに達成することでラディカル・リファレンシャル・リフレクシヴィティが作用すると解説している。そのことはよいのだが、このラディカルな実践の効果は何なのかは深い議論はなされないままになっているとし、ボルナーがデリダやローティやフーコーの議論と同じ次元にあることを主張していることについても、「私が思うところでは、ボルナー自身も含めて、この問題提起は課題として出されたままなのである。実際、現時点で何の答えも見出せていない。…(中略)…とにかく、いずれにせよ、『リファレンシャル・リフレクシビティ』を通して立ち現れる根本現象は、エスノメソドロジーにとって、荒々しい未開の原野なのである。そこへ立ち入るかどうかは、あなたの意志にかかっている」(兼子、1998 11頁)と述べるにとどめられている。兼子は、他のところでも、ボルナーがラディカルとカリファレンシャルというリフレクシヴィティは、エスノメソドロジーの発展から実質的に取り残されていると指摘されていることに触れ、「しながら、この議論だけではいまひとつ『ラディカルである』ということがどういうことなのか見えてこないように思われる。この点をボルナーも自覚しているのか、次に『ラディ



カルである』ことの具体例をあげ、『根本的な内省 (radical reflection)』とは違うということを主張する」(兼子、1995 58頁)と述べて、ボルナーの続きの二つの章の参照を求めるにとどめられているのである。

しかし、兼子の指摘の通り、このラディカル化については、まさに、リファレンシャル・リフレクシヴィティそのもののラディカル化の過程が要点である。それは、すでに述べたとおり、リフレクティヴ(内省的)な研究とは異なって、思考の枠を問題にすることによって、その枠の内部にとどまっているリフレクシヴな研究それ自体をゆるがせ、不安定にし、時には破壊せしめるような動きである。兼子が、ボルナーに何の答えも見いだせない、あるいは見えてこないというのは、このラディカル・リフレクシヴィティとデリダやフーコーのポスト構造主義的思考とが「同じ次元にある」という、その関係性が明確に捉えられていないためではないかと思われるのである<sup>5)</sup>。もちろん、兼子は事の重大性はよく認識しており、それ故、「荒々しい未開の原野」だとして注意を喚起しているのである。しかし、惜しむらくは、その探究は、読者の意志に委ねられているのである。それは、まさにエスノメソドロジー的取り扱い方であり、その限界でもある「元に立ち戻る回帰的態度」なのかも知れない。

これに対して、皆川満寿美は、ボルナーの立場に対して、批判・反対の立場を明確に打ち出している。皆川は、「ボルナーの主張には、エスノメソドロジーを理解するためには、重大な障害となる側面が含まれていると考える」となし(皆川、1999、129頁)、結局、ボルナーのリファレンシャル・リフレクシヴィティについては、「しかし、私見によればそれは誤りである」(同上、135頁)とし、また、特権性の問題に対しては、「大変奇妙に思われる」(同上、140頁)

としている。さらに、会話分析研究に対する説については、「ボルナーが主張するような批判を向けることは可能だろう。であるならば、会話分析研究は、エスノメソドロジー研究ではないと結論づければよいのである(しかしボルナーは、そうしていない)」(同上、143頁)と述べて反対論を展開しているのである。

皆川がボルナーのリファレンシャル・リフレクシヴィティを誤りだとするのは、むしろ皆川自身が自己の内生的リフレクシヴィティに固執し、会話分析に限定するエスノメソドロジー研究者としての特権的立場の枠から抜け出られないためではないかと思われる。ボルナーの内生的リフレクシヴィティ批判が、皆川に「奇妙だ」といわせるのは、その奇妙さは「ボルナーが、自己言及的リフレクシヴィティからラディカル・リフレクシヴィティを引き剥がした際に生じたことである」(同上、138頁)として、リフレクシヴィティのラディカル化の過程も、そこにおける論理も理解しない、むしろ不当な解釈に基づくものに思われてならないのである。その上、そのラディカル化は、結局、「分析的言説の普通の作動に介入し、いかなるものであれリアリティの理解というものを腰砕けにし、settling 作業を目に見えるようにする」という探究の基盤(又は枠)を掘り崩すような認識に至る点を引用しつつ批判し、「それはラディカルな特権を与えているのであり、そして私には、このことは大変奇妙に思われるのだ」(同上、140頁)というのである。しかし、これは奇妙どころか、ラディカルということの人間の意味を追究して止まぬ動きの然らしめるところであって、従来の settling (理論の固定化)の特権を打ち砕き、その先の根源追究の、まさに「差延」の動きなのではないか<sup>6)</sup>。皆川はこの動きを、逆に自らの研究の特権をもって打ち砕こうとしているように思われてならないので

ある。

その特権的態度は、実は、会話分析研究に対するボルナーの主張への曲解においても、前述した通り、みられるところである。ボルナーは、会話分析研究はエスノメソドロジー研究でないと結論づけるはずは全くありえないだろうからである。皆川も括弧つきではあるが、ボルナーは「そうしていない」というのである。ボルナーの見解の検討で補足的に述べたように、ラディカル化の過程は、究極のところ再び元のところへ、元の settling のところへ戻ってくるのであり、それが reflexivity の reflexivity たるゆえんであることをもってボルナーは結論づけているのである。

エスノメソドロジーにおけるリフレクシヴな研究は、これまでの settling の枠の中で新たな settling に向けて、その二重性を解きながら動き出す場の研究であって、今日の社会状況の進行する中で、そうした追究のもつ意義はきわめて大きいし、そうした研究を保証するキー概念がリフレクシヴィティ概念であろうと思うのである。

皆川論文は、山田富秋の所論に対する批判も一つのねらいである。山田は「ローカルでポリティカルな知識を求めて」(山田、1998)において、ボルナーの説に対する解釈と意味づけ、その発展のさせ方について述べているのであるが、筆者には、山田の方が妥当性をもつものように思われる。とりわけ、リファレンシャル・リフレクシヴィティがラディカル化されるのは、山田のいう通り、「調査者と対象者との共同作業(リフレクシヴィティ)自体がポリティカルな意味をもっている」のであり、ボルナーは「フィールドに行くことで初めてわかったり、驚いたり、あるいは、非難されたりする研究者自身をラディカル・リフレクシヴィティによって取り戻そうとした」のであるとして、ローカ

ルな想像力を回復すべきときであるとし、「自然言語の習熟性」という一般性をもつ「特定の他者を排除する」ポリティカルな帰結をいわば反転させ、「現実のリフレクシヴでポリティカルな社会的構築を明らかにする道」につなごうとして「繊細でポリティカルなエスノグラフィー」の方法を提出した山田の意図はきわめて重要であるように思われるのである(同上、とくに60～64頁参照)。

その「エスノグラフィーを実践することによって世界にコミットする必要性」を説いている山田の「繊細でポリティカルなエスノグラフィー」は、当事者としてコミットすることではないと述べているのであるが、このことに対してさえ皆川は非難めいた言い方をしているのである。しかし、山田のいう通りであろう。われわれも、身体障害者の日常生活世界といえる生活現実、調査研究でアプローチしたときに直面したのであるが、当事者ではないわれわれの入る余地はないかに感じられるその世界は、研究者であるわれわれの世界とあまりにも違っているという認識からはじまり、それまで身につけてきた諸概念、理論枠組をもって理解してきた世界の構造全体が見事にゆるがされていき、それにも拘らず、彼等の世界にコミットしようとし、そしてコミットしてきた結果、得られたことは、研究者と対象者との共同作業によって新たな〈共同性〉〈共生社会〉を構想し、具体的な運動を展開していくこととなったという経験をもっており<sup>7)</sup>、それはまさにリフレクシヴであり、ポリティカルでなければならないことを示していたと思うからである。

障害者、しかも知的障害者のところへ赴き、エスノメソドロジーの会話分析の方法を用いた皆川の研究は、一体、どんな意味をもちうるのか、甚だ疑問とならざるをえないのである<sup>8)</sup>。

山田の提唱する「繊細でポリティカルなエス

ノグラフィー」はリフレキシヴィティをキー概念とする社会学研究全体の中で、日常的な行為場面を研究対象とする最も基礎的かつ重要な作業となるように思われる。そのコミットすべき世界は、どのように構築していったらよろしいのか。そのためには、日常的な行為場面から離れた社会の次元におけるリフレキシヴィティ概念についての社会学研究と共有できる認識が何としても必要なのではないかと思われる。

その点で、好井裕明の「螺旋運動としてのエスノメソドロジー」(好井、1999 所収)の考えは注目に値する見解である。好井は、皆川のエスノメソドロジー研究を引き合いに出しながら、ガーフィンケルの示した「解釈定理」<sup>9)</sup>に従ってこれを考察し、その実践の過程に生じるであろう新たなトピックの渦にエスノメソドロジスト自身が巻き込まれることで、「彼／彼女自身の『現世的推論』が解体、再編の危機にさらされることになり、知的実践自体も“揺らいでいく”。この“揺らぎ”こそ、ポルナーのいうラディカル・リフレキシビティがもたらすもともと興味深い効果のひとつなのである。」(同上、92頁)と適切な解釈を下すとともに、その上で、「エスノメソドロジストが、自らの存在を『探究の舞台』から自在に消したり現したりできる“魔術”としての科学的手続きのうさんくささに嫌気がさし、それを投げ捨て、エスノメソドロジー的現象を発見し、自らの意識や身体そして生活がエスノメソドロジー的探究に影響を及ぼし、逆にそれが自らの日常生活に返ってくるという執拗な“螺旋”に巻き込まれるとき、彼／彼女は、その“思いがけない深さ”に魅力を感じるようになる。」(同上、93頁)と、誠に注目すべきことを述べている。そして、『『現世的推論』それ自体の主題化や『推論』からの解放は、エスノメソドロジストに“こちよい眩暈”を引き起こすのに十分なのであ

る。しかし“こちよさ”にいつまでも浸ってはいられない。はたして『現世的推論』からの解放はどのようにすれば可能なのであるか。“螺旋運動”の終着点は、どこになるのだろうか。」(同上、93頁)と重大な問いを提出しているのである。

好井は、結局、「エスノメソドロジーを志向する者は、エスノメソドロジー的秩序現象の記述に精を出す以前に、なによりもまずエスノメソドロジストとしての『わたし』をも巻き込んだ錯綜したりアリティの“螺旋運動”のなかで、それ自体を詳細かつ執拗に見ていく『ラディカルなエスノグラファー (a radical ethnographer)』であるべきなのである。」(同上、96頁)と結ばれているのだが、ラディカルなエスノグラファーであるべきだというのは、山田の繊細でポリティカルなエスノグラファーの実践と殆ど同じと思われる。しかし、現世的推論をゆるがせ、解体して、再び元のところに帰ってくるとしても、螺旋運動であるから、以前と全く同じところに回帰するのではなく、以前とは違ったレベルで、位相を異にした地点に回帰することを意味するのであろう。

しかし、螺旋運動は、その結果として、螺旋の向きも方向も異なる運動がありうる。方向性において再び二重性構造の問題が生じてくる可能性があるのではないか。もしそうであるならば、ただ螺旋運動の中の実践だからといって、現世的推論からの解放の“こちよさ”にいつまでも浸ってはいられないのと同様に、この螺旋運動の中にいつまでも“こちよさ”を味わっているわけにはいかないであろう。そこに生じてくるであろう二重性をどのようにして解いていくのか、そのとき螺旋運動の先に選ばれていく道についての判断の妥当性は何によって確定していくのであろうか。

これは、ポルナーのラディカル・リフレキシ

ヴィティがもっている枠を問うことであろう。換言すれば、それ自体の基盤の妥当性判断を問うことでもであろう。それは、エスノメソドロジーがエスノメソドロジー自体を取り巻く他の社会学の領域におけるリフレクシヴィティ概念に基づく研究と連帯し、判断していくことの必要性を示しているのではないかと思うのである。

とりあえず、ここでは、好井のいう螺旋運動の認識こそ、デリダやフーコーと同じ次元にあることの証左であり、兼子のいうリフレクシヴィティを通して現れる根本現象であり、また、荒々しい未開の原野に立ち入ったことを例示するものと思われるというにとどめておきたい。しかし、もしそうであるならば、デリダ風にいえば、この螺旋はまさに「差延」の動きということができよう。その動きは、社会の様々なレベルで生起しているリフレクシヴィティを貫く動きであり、ゆらぎ→解体→回帰→再構成→の循環を螺旋状に辿ることを意味するであろう。その終着点は恐らくなく、無限のプロセスとしかいいようのないものであろう。それにもかかわらず、無限のプロセスであることを承知の上で、一段また一段と、螺旋運動によってはじめて到達する根源への深みのレベルに向かうこと、それが螺旋運動の意味として理解できるであろう。

好井のいう螺旋運動は、そして、ラディカル・リフレクシヴィティ概念の内包する回帰運動は、日常生活過程というすべての人が巻き込まれざるをえない最も身近な点において、二重性をもつ動きの囚となる胚珠ともいうべきものが交錯している「矛盾のるつぼ」における動きそのものを取りおさえようとするものに思われてくる。それはリフレクシヴィティの運動の原点における研究ともいえるわけで、社会学の中で最も基礎的な重要な研究であることを確認して、他の社会学領域におけるリフレクシヴィティ概念の検討に進むこととしたい。

### (3) 社会学におけるReflexivity 概念の発展

#### 1) アルヴィン・グルドナーの社会学における Reflexivity 概念

アルヴィン・グルドナーは、ガーフィンケルより少し遅れて、しかし殆ど同時代に、T. パーソンズを中心とする機能主義社会学の体系の後、ミクロ社会学理論が林立するに及んで、従来の社会学理論を批判・反省する新たな社会学の領域として Reflexive Sociology を提唱したのであった。当時の米国において、社会学理論の構築作業が、否認された世界を打ち倒し、容認された世界を防衛しようとする象徴的努力であることを批判し、それとは異なる理論形成の地平をきわだたせる新しい「社会学の社会学」として“Reflexive Sociology”の名称を与えたのである (Gouldner, A., 1970, p.488=1975, 3. 207 頁)<sup>10)</sup>。

グルドナーの「自己反省の社会学」は、まず何よりも、社会学がラディカル社会学になる必要があるとし、社会学を変換し、社会学者が総体的人間としていかに生きるかを受け入れ、現在存在している社会学を超克して、社会学の歴史的使命を果たさんとすることにあつた。そのためには、社会学者の新しい実践としての研究行為を必要とすること、他者の社会的世界についての妥当で確実な情報を生産する能力を高めると同時に、社会学者自身の明識 (awareness) を深めることが求められるとなし、従来の社会学の方法論的二元論を厳しく批判・反省し、「研究の対象にされている人々もまた、人間関係についての食欲な学究である。かれらもまたかれらの理論をもち、かれらなりの研究を行う」(ibid. p.496=220頁上段)と考え、方法論的一元論をもって、知の探究者であると同時に変化の担い手でもある自己自身の明識に到達

しようとするのである。

さらに、「自己反省の社会学」は、「ありとあらゆる権力は社会学の究極の理想に対立的である」という情報を把握することができ、「〈魂を売る〉ことの低劣さよりも〈魂を求める〉ことのみかけの無邪気さの方を好む」(ibid. p.499=223頁上段)という。その意味で、価値自由の社会学に疑問をもち、価値へのコミットメントを主張する。そのコミットメントに危険が伴っても、それをあえて甘受するのである。

かくて、「自己反省の社会学」は、「昨日までのイデオロギーが今日ではもはやわれわれの蒙を啓くことがなく、逆にわれわれを盲目にする可能性があることをわれわれに警告してくれるような歴史的感性を備える必要がある。」(傍点はイタリック体 ibid. p.499=224頁上段)とし、また、「科学革命は、今日の社会条件の下では、地球大の規模での自己破壊の道へ展望を開いたということ、および、もっと一般的ないい方をすれば、科学は、ほとんどすべての現代の産業社会体系を維持する道具と化してきたことを告げるような情報である」(ibid. p.500=224頁下段)として、そのような情報に向き合うことを要求するのである。さらに、「自己反省の社会学」は、アメリカ社会学がリベラル・イデオロギーの持主であり、また、福祉国家と同盟を結び、そのコンサルタントになり、その司祭役をつとめ、同時にこの国家の従者ともなる人々によって、その部署が占められることを批判し、自己反省の社会学の歴史的使命は批判的な明識を育てることにあり、このばあい批判的に明識すべきものは、「現りベラリズムの性格、大学およびアメリカ社会学へのリベラリズムの支配力、福祉政策と戦争政策との間の弁証法、および福祉と戦争双方のための市場調査者としてのリベラルな社会学者の役割などである」(ibid. p.502=227頁下段)とする。後述するギデンズ

やベック、それにブルデューの今日の状況に対するリフレクシヴな立場からの主張の見事な先例をみる思いがするのである。

この基本的な方法的立場は、パラダイムについても主張されるところがあり興味深い。「かれ(社会学者)は、自分自身の〈さまよえる〉衝動よりも、現在規定されている科学のパラダイムないしモデルの方が正しいし信頼もおける、ということに賭けることはできる。このばあいかれは、自分の敗北に賭けていることになる。だが、かれは、自分の勝利に賭けることもできるのだ。」(ibid. p.506=232頁下段)とパラダイムの要請に批判的見解を述べているのである。今日のパラダイムも、パラダイム転換したといわれるあとのパラダイムも、同様であろう。

この点とも関係して、社会学者の役割は〈橋〉であるという点も、reflexivity 概念追究の意義にかかわって興味深い。グルドナーは、「社会学者の文化的に基準化された役割は、他の社会的役割と同様、ひとつの〈橋〉と考えられうる。この橋は、便利にすると同時に制限もつくり出し、また人びとにある種の障碍を〈克服〉させ得ると同時に、かれらが達成できるかもしれない〈他の側面〉を制限するという代償を払わせる。その上、社会的役割は常に未完成かつ不完全な橋である。橋は空間にいまだ部分的にしか懸かっていないといった趣きである。この不完全さこそ永遠の問題であって、たとえ橋を尊敬する者であってもその橋がかれらに向こう岸へ完全に渡してくれることをあてにはできないのである。」(ibid. p.506=233頁上～下段)と述べているのであるが、その後の社会学における reflexivity 概念をキー概念とする研究は、まさに、この〈橋〉であり、架橋の試みであったとみることができよう。

こうして、グルドナーは自己反省の社会学の〈領域仮説〉を提唱し、歴史的使命に向かって

進むことを呼びかけたのであった。

しかし、これに対しては賛否両論の評価があった。それは評者の領域仮説を反映しているためかと思われる。たとえば、オニールは、パーソンズの幽霊に対してハムレットの役をグルドナー程よく演じた者はいなかったとし、また、ガーフィンケルに対しては、街のアーティストのようなイメージをもって取り扱っていると批判し、グルドナーは反省的社会学の哲学的基础を考察せずに、社会学の政治的選択の道を歩んだのだと批判しているのである (O'Neill, J., 1972 p. 209)。

たしかに、グルドナーのガーフィンケルに対する批判的取扱いは一面的な感がする。たとえば、一方では「ガーフィンケルは社会的状況をいわば〈内側〉から、つまりそこで生活する人々にとってそれがあらわれるままに、理解しようとする。」(Gouldner, A. op. cit. p.391=68頁下段)と捉えている反面、他方では「ガーフィンケルが行なっているのは隠された文化的基础の考古学的発掘にすぎない、と結論づけるならば、それは誤りであろう。というのも、かれの発掘作業は主として小規模な世界の破壊を通じてすすめられているからである。」(ibid. pp.392~3=71頁下段)という。また、「ガーフィンケルの研究は現実性についての常識に対する攻撃である」と述べ、「エスノメソドロジーの実験行為の基底には一種のアナーキズム的な動機がはたらいて」おり、それは、「小規模ながら現状との一種の対決行為であり、暴力を用いない現状への抵抗なのである。」(ibid. p.394=74頁上段)と述べて、結局、「ガーフィンケルの社会理論は政治的に行動主義的な1960年代に、とりわけ現時点の政治的に反抗的な学園にこそ、よりふさわしい社会学である。」(ibid. p.395=74頁下段)と結んでいるのである。

このように、ガーフィンケルのエスノメソド

ロジーに対するグルドナーの理解と評価は、すでに本論文(2)において考察したように、ガーフィンケルのエスノメソドロジーの方法の中に織り込まれていた reflexivity の二つの側面、endogenous (内生的) reflexivity と referential (リファレンシャル) reflexivity を切り離して別々に理解しているように思われる。内生的リフレクシヴィティも、ただそれが内側からあらわれるままに理解するだけでなく、エスノメソドロジー的無関心 (indifference) によって、そこに潜在する思考の枠に捕らわれた認識と実践を明らかにするためのものであり、また、リファレンシャル・リフレクシヴィティは、ラディカルになる傾向があり、後にラディカル・リフレクシヴィティ (radical reflexivity) として、破壊的でアナーキーに見えるようにはするが、元の状況場面のところへ戻るのであって、本来の reflexivity の機能を発揮することとなるのである。こうした点を見過ごして、ガーフィンケルのエスノメソドロジーを批判するに至ったがために、エスノメソドロジーにおけるリフレクシヴィティとグルドナーの主張する reflexive sociology との間には、発想においては共通性があったにもかかわらず、深い溝を生じさせてしまうこととなったように思われる。そのため、エスノメソドロジー研究者の間では、グルドナーの reflexivity の意味は「自己反省」であって、あたかも reflection の意味を脱しないものであるかの如く思われ、敬遠される結果となってしまったように思われてならないのである<sup>11)</sup>。

しかし、これは、リフレクシヴィティの二つの位相の区別と同様、実は個人と社会を共に対象とする社会学の研究対象領域の二つの次元の相違からくる違いではないかと思われる。すなわち、エスノメソドロジーの対象領域は、日常的生活場面における成員 (メンバー) のアカ

ウント実践であるのに対し、グルドナーの社会学の対象領域は、むしろその理論枠にかかわって、認識と実践の双方の基底に存在する枠組とその変革の問題である。もちろん、エスノメソドロジーにおける社会成員概念<sup>12)</sup>は単なる個人ではないにしても、グルドナーの問題意識からみれば、それは個人の側の狭い領域の問題にみえるであろうし、グルドナーの中心課題は、人間を疎外する方向で進む社会、国家のあり方の中で、それに従属する形で、その構造を支える役割から脱することが出来なかった社会学それ自体を批判する、社会学の自己反省であり、それ故、社会学の社会学として、その方法論をめぐる論理追究のレベルで reflexivity を問題にしているのである。

それは明らかに社会学全体の研究方法論の問題であり、リンチの分類でいえば、まさに方法論的 reflexivity に位置づけられるべきものである。しかし、reflexivity ということ自体は、現実の人々の生活の中にも、研究者の研究実践にも、また社会にもありうる。研究者の研究方法論における reflexivity は、人々と社会双方における reflexivity の仲介者であり、個人の側へも、社会の側へも分け入って行くが、また元のところに戻ってくる。この循環過程を辿るのであろう。そして、その後の社会学における reflexivity 概念は、所詮は、グルドナーに始まるこの循環、回帰運動の一コマなのかも知れない。

## 2) 「再帰的近代化論」における Reflexivity 概念

次に、ウルリヒ・ベック、アンソニー・ギデنزおよびスコット・ラッシュの共著『再帰的近代化』によってよく知られるようになった理論のなかで、reflexivity 概念はどのようなものとして展開されてきたかをみていきたい。そ

れはリンチの分類では、何よりも実質的な reflexivity の中に含められるものではあるが、当然のことながら、方法論的 reflexivity の意味も含まれており、それ故、三人三様の捉え方になっているものと思われる。そこにみられる三者の異同のもつ意味を追究していく。

### (a) アンソニー・ギデنزの Reflexivity 概念

ギデنزの場合の reflexivity の意味は、まず第一に、「人間のすべての行為を規定する特性である」とし、その根拠は「人間の行為は、…(中略)…行動とその行動の生じた脈絡にたいする一貫した…モニタリングを具体化している」(Giddens, A., 1990 p.36=1993, 53頁) ことにあるとされている。これは「行為の再帰的モニタリング」と称され、ギデنزの社会学的方法の新しい規準に深くかかわるものであり (Giddens, A., 1976 pp.155~162=1987, 224~235頁参照)、ギデنزの reflexivity の第一の意味である (O' Brein, M. et al. (eds.) 1999, p.25)。そして、第二の意味は、「その概念が社会生活を記述する時に用いられて、社会生活にいつも決まって入り込み、それを変えていくという意味での知識と意味づけを指す」場合である (ibid. p.25)。前者は個人の行為のレベル、後者は社会生活のレベルでの再帰的モニタリングを指しているわけである。

ところで、再帰性は、ギデنزによれば、前近代の文明では、伝統の再解釈を明確化することだけにほぼ限定されていたのに対し、近代になるとそれとは異なる特質をもつようになり、「社会の実際の営みが、まさしくその営みに関して新たに得た情報によってつねに吟味、改善され、その結果、その営み自体の特性を本質的に変えていくという事実に見出すことができる」(Giddens, A., 1990 p.38=1993, 55頁) ようになり、「モダニティに特徴的なのは…(中略)

…再帰性が一もちろん省察それ自体に対する省察も含め一見境もなく働くことなのである」(ibid. p.39=56頁)とされていることは注目しておかねばならない。同時に、「社会科学は、省察の形式化された形態(専門的知識の特殊類型)であるが、省察はモダニティの有する再帰性全般の基盤をなしている」(ibid. p.40=57頁)とも述べられており、明らかにギデンズの場合は、省察(reflection)は社会科学あるいは専門的知識の「内容」をなすものとされているのであり、また、その省察それ自体の省察(「内容」それ自体の見直し)をも含めて再帰性が働く、それがモダニティの特徴であるとしているのである。換言すれば、モダニティの再帰性は、行為から始まり、社会の様々なレベルで現れているが、省察はその再帰性全般の基盤であると捉えられており、しかも、省察は省察を生み、たえず、見境もなく働くともっているわけである。

こうした省察の省察としての再帰性は、「社会学の言説や、他の社会科学の概念や理論、知見は、それが何であれ研究しようとしている対象の中に絶えず『循環的に出入りしていく』。その際、これらの言説や概念、理論、知見は…(中略)…研究対象を再帰的に再構築していく。」(ibid. p.43=61頁)とされ、また、「モダニティの再帰性は、体系的な自己認識が絶えず生成されていくことと直接関係しているため、専門家の知識と一般の人々が行為の際に用いる知識との関係を固定化しない」(ibid. p.45=63頁)と述べられていることから明らかにみてとれるように、循環、再構築、生成などがその不可欠の特徴となっていることは注目に値する点である。

以上のような基本的な見解に基づきながら、ギデンズは、社会システムの次元における再帰性を「モダニティの制度特性」(institutional dimensions)としておさえ、これを分析していくのである(ibid. pp.55~78=75~100頁)。

社会システムの次元では、モダニティは、抽象的システムの一つの柱である専門家システムに対する信頼に基づきつつ展開される。それ故にそれはまた新たなリスクを伴うものであるわけである。その場合、専門家システムの再帰性は、その対象とする一般の人々の知識の専門化によってその知識が見直され、さらに、その間の相互作用が循環しながら再帰的に進まざるをえないという事態をもって示されるのである。

この再帰性は、社会システム全体にも及ぶわけであるが、その制度特性として挙げられている①資本主義、②産業主義、③監視、④軍勢力の四つは、モダニティの基盤であるとともに、その帰結は重大なリスクを生む可能性があることと捉えられているのである(ibid. pp.163~173=203~214頁)。すなわち、①の資本主義という制度特性は「経済成長メカニズムの破綻」に、②の産業主義という制度特性は「生態系の荒廃や惨禍」に、③の監視という制度特性は「全体主義的権力の増大」に、そして④の軍勢力という制度特性は「核戦争や大規模戦争」に、それぞれ陥る可能性があるのであって、いずれも人類社会の破滅につながる重大な危機であり、われわれはそのような重大なリスクに直面しているというわけである。

しかし、他方で、このような重大なリスクの可能性に対して、これまでの社会運動の諸側面はそれを回避せんとして、4つの制度特性それぞれにおいて、労働運動、言論の自由・民主化を求める運動、エコロジー運動および平和運動として展開されてきたし、また、このようなリスクの潜在するモダニティを凌駕するポスト・モダンの秩序の輪郭を描くこともできるとし、注目すべき見解も提出しているのである。

ポスト・モダンの秩序の輪郭は、①~④の制度特性それぞれに応じて、①「ポスト稀少性システム」、②「科学技術への人間性の付与」、③



「多元的な民主的参加」、④「非軍事化」として描かれうるとしているが、その上で、「ポストの稀少性システム」はさらにその下位システムとして、①「社会化された経済組織」、②「一元化された世界秩序」、③「地球環境介護システム」、④「戦争の超克」の四つがその構成要素として描かれている (ibid. pp.164~166=202~204頁)。

こうした下位次元の構成要素を下位システムとしてもつ「ポスト稀少性システム」は、きわめて注目すべきアイデアであると思うのであるが、ギデنزの『近代とはいかなる時代か?』においては、その内容の詳細はあまり示さずに終わっており、ただ、ポスト稀少性という概念が意味をもちうるかと問われれば、「むしろ私としては、世界の自己破滅の道をたどらないようにするためには《他にどんな選択肢があるのか?》と問いたい」とし、少なくとも「ポスト稀少性システムは、社会生活のあり方に重大な変化をもたらすため、絶え間ない経済成長によせる期待を修正していく必要があろう。富の地球規模の再分配が必要となろう。」 (ibid. pp.165~166=206頁) と述べるにとどめられているのである。それにしても、そのアイデアは、人類社会の自己破滅を回避せんとするものであり、そのために経済のあり方の根本的な変革とそれに見合った社会生活のあり方の変化が含まれている重要な構想といわねばならないわけである。

その後のギデنزの著書、論文の中で、このポスト稀少性システムについて述べられているところから、そのアイデアの中身を多少知ることができる。まず、*Beyond Left and Right* (『左派と右派を超えて』) の中での主要な点は次の諸点である。(Giddens, A. 1994, とくに pp.97~103; pp.182~187) ①、ポスト稀少性経済という観念は、もともとはマルク主義のア

イディアであり、欠乏のない豊かさが普遍的となる時代のビジョンであり、ユートピアであった。しかし、ポスト稀少性経済というコンセプトは、今日では、全くユートピアではない。「ユートピアの特徴をもってはいるが、現実の観察可能なトレンドと一致しているから、現実的でないことはない」 (ibid. p.101) こと、②、ポスト稀少性は、欠乏ということがないことを意味しているのではないこと。それは、「もはや経済成長が最優先の重要性をもたないような一つの状況を、あるいはもっと正確には、いくつかの状況の複合を、指しているのである」 (ibid. p.101) こと、③、ポスト稀少性経済に向う傾向は、蓄積過程が、価値ありとされている生活様式の脅威となったり、あるいはそれを破壊するようなことが広範に見られるところに出現するものであること、それは「蓄積が明らかにそれ自体、反生産的になるところで、すなわち、過剰な発展が次善の経済的、社会的あるいは文化的な結果に導いていくようなところで、また、生きることの政治学 (life politics) の領域では諸個人あるいは諸集団が経済的収益を最大にすることを制限する、もしくは、積極的にこれに反対するライフスタイルを決定するところで、出現する。」 (ibid. pp.101~102) とも述べられており、「生きることの政治学」による社会生活のあり方の変革を導かざるをえないものとしてあること、以上の3点である。とりわけ注目すべきは、現実の経済そのものの再帰的な動き——蓄積それ自体が反生産的になり、過剰な発展が広範な変動を結果する——が根本的な経済および生活の変動を惹き起こすことであろう。

同じ年に出版された『再帰的近代化』の中では、ギデنزの場合の reflexivity は、制度的再帰性と捉えられ、それは「伝統の消滅とともに伝統の再発見を際立った特徴とする世界であ

る」(Beck, U., Giddens, A. and S. Lash, 1994, p.185=1998, 337頁)として捉えられており、伝統社会から近代社会への移行と近代におけるモダニティの徹底化にむしろ焦点がおかれて論じられているのであるが、ポスト稀少性システムあるいはポスト稀少性秩序の問題にも、その出現の問題と生活・福祉への影響の問題について触れられている。基本的には上記したところと変わりはないのだが、「一人ひとりが、純然たる経済的成功以外のものに、より高い価値を見出し、みずからの就業生活を積極的に再構築していく限りにおいて、初めて出現し得る」(ibid. p.195=354頁)として、就業生活のあり方について述べられている点、また、「ポスト稀少性秩序は、経済発達が停止していく秩序ではない。富の創出は、依然まだしばらくの間は必要であろう。」とし、「さらにもっと重要なのは、われわれは、地球上のすべての人びとにとって今とは違う生き方があることを、われわれの垣間見るポスト稀少性システムの姿をとおして心に描くことができる」(ibid. p.196=356頁)とそのビジョンの意味の一端が述べられている点、さらに、福祉国家の限界は明白になっているとし、「全地球規模の政治形態について考えていく際に、ある種の巨大な再配分的福祉国家を予想することは、もはや何の役にも立たないのである。別の観点から考えていく必要がある。」と述べ、個人や集団の再帰性を考慮に入れ、またその再帰性に依拠していかなければならないこと、たとえば、開発や発達の問題は、「富める人びとは、貧しい人びとから多くのことがらを学んでいく必要がある。また、欧米の文化にも、過去において明らかに欧米が消滅の危機にさらしてきた他の文化から、学ぶべきことがらが数多く存在するのである」(ibid. p.196=356~357頁)と再帰的思考方の必要性を説いていることなど、注目されるべき点である。

とくに、ポスト稀少性システムの下での就労の状況については、前掲書の中でも、たとえば「老人たちは一般に労働し続け、労働市場から自由に出たり、再び入ってきたりすることが、むしろ、すべての年代の人たちに普通のこととなるだろう。伝統的な意味での退職が完全に存在しなくなったところでは、サバーティカルも段階的退職も、退職リハーサルもすべて可能となるだろう。」(Giddens, A., 1994, p.183)と、興味深いことが述べられているのである。

さらに、その2年後に書かれた論文は「豊かさ、貧困とポスト稀少性社会のアイデア」という誠に興味深い表題を掲げたものであったが、元の国連の機関(UNRISD)から出された論文は末消線の入ったものであった<sup>19)</sup>。しかし、すでに再録してあった雑誌によると、そこでは、次のような点が注目される。(Giddens, A. 1996. pp.365~377)

① 今日では次第に「生産された不確実性」とギデンズの呼ぶ状態が増大しており、リスクも、「外部的リスク」と「生産されたリスク」(manufactured risk)<sup>14)</sup>に分けて考えなければならなくなっていること。

② reflexivity は、自己意識を意味するものではなく、脱伝統化された社会秩序における生活条件のことを指すこと。

③ 福祉国家と福祉制度については、保険システムは外部的リスクへの対処として発展してきたものであるが、生産された不確実性が支配的になってきた時代においては、外部的リスクに基礎をおく福祉制度は崩れ始めており、福祉国家の積極的批判が必要であって、それは生産された不確実性の脱伝統的世界に沿った福祉制度の再構築をめざすものであること。

④ また、「解放の政治学」に加えて、あるいはそれに代わって、「生きることの政治学」<sup>15)</sup>が必要となる。生きることの政治の問題は「ポ

スト稀少性社会」の出現の意味を理解するようになってきていること。

⑤ そこでは、ポスト稀少性社会とは、明確な社会秩序の形態ではなくて、一連の出現しているトレンドを意味しているとされ、そのトレンドとは、生きることの政治学の諸問題が政治的論争になっていることが次第に多くなっていること、生産されたリスク環境が一般に広がってきていて、誰一人、そこから完全に自由になれなくなっていること、経済成長にコミットしているような生産中心主義が衰退してきていること、モダニティの諸問題は、必ずしもモダニティをもっと進めることで解決されるとは限らないという認識が増大していること、などが挙げられている。

さらに、その後1998年に出版された『第三の道』(Giddens, A., 1998=1999)においては、「ポスト稀少性」については述べられてはいないが、それと関係している「ポジティブ・ウェルフェア」の考えは再び提出され、それを含んだ「社会投資国家」(ibid. pp.99~128=168~213頁)への政策は、ブレア政権下で実施されつつあるわけである。それは、基本的にはギデンズの reflexivity 概念に基づく一連の追究過程の成果とみることができよう。

しかし、「第三の道」は反響を呼び、世界的に議論されてきたところであり、ギデンズ自身も、その批判を含んだ反批判の書も著わしている(Giddens, A., 2000; Giddens, A. (ed.), 2001)。そうした中でカリニコスの厳しい批判は、きわめて注目に値する(Callinicos, 2000)。そこでとくに注目すべきことは、第三の道から批判されたはずのアメリカの新自由主義的政策の下でも第三の道を標榜するようになってきていること、しかも他ならぬアメリカのシアトルからアメリカの政策に対する批判が起こり、ヨーロッパにおける批判論と連帯して反対運動が展開さ

れていることである(ibid. pp.97~125)。そこでは改めて、資本主義そのものが問われており、「ポスト資本主義」が新たに追究すべき課題となっている(ibid. pp.109~120)のである。後述するブルデューの『市場独裁主義批判』等とともに、これらは現代における reflexivity が、とりわけその全体的な姿が、螺旋的でもあるが、方向を異にする進み方のあることを知らしめるもののように思われてならないのである。

#### (b) ウルリヒ・ベックの「リスク社会論」における Reflexivity 概念

ベックの場合、伝統的社会の近代化と産業社会の近代化とを区別し、前者を単純近代化、後者を再帰的(自己反省的)近代化として区別する。この近代化を軸として、これまでの社会の変化を前近代、単純な近代および再帰的近代の三つの段階に区別して考えていることが前提となる(ウルリヒ・ベック, 1998, 序論 7~19 頁参照)。そして、近代に産業社会が対応しているのに対し、再帰的近代には「リスク社会」が対応していると捉えられているわけである。

そこでベックの再帰的近代化論で注目されるべき点をあげると、第一に、再帰的近代化は「工業社会というひとつの時代全体の創造的(自己)破壊の可能性を意味している。この創造的破壊の『主因』は、革命でも、恐慌でもなく、西側社会の近代化の勝利である」(Beck, U., Giddens, A. and S. Lash, 1994, p.2=1998, 11頁)といわれているように、矛盾を孕みながら進んでいる現代の産業社会の両義性を示していることである。その両義性は、さらに、「再帰的近代化とは、まず、もう一つ別のモダニティによる工業社会の脱埋め込みと、次にもう一つ別のモダニティによる工業社会の再埋め込みを意味している。」(ibid. p.2=12頁)と説明されたり、また、「再帰的近代化とは、発達

が自己破壊に転化する可能性があり、またその自己破壊のなかで、ひとつの近代化が別の近代化をむしばみ、変化させていくような新たな段階である」(ibid. p.2=12頁)といわれている。伝統的社会の近代化によって成立したモダニティが、さらに進むと自己破壊を起こし、その結果あるいはそれを契機にして、もう一つ別のモダニティへの途を開くと捉えられているわけである。それは「近代化の近代化」(ibid. p.4=14頁)ともいわれているのである。

さらにベックは、再帰的近代化とは、「影響の及ぶ範囲が広く、網の目の粗い、構造をつねに変革する近代化である」ともいい、それは政治的にも重要な現象で「社会全体に不安が際限なく深く浸透し、またあらゆる領域で同じように派閥闘争が際限なくつづくことを暗に意味」しており、同時にそれは「発展のダイナミズムをひとつしか包含せず、そのダイナミズムは、別々の背景をもとにしているとはいえ、それ自体の力で意図しない正反対の帰結をもたらしていく。さらに…(中略)…狭い意味でのリスク社会の葛藤ダイナミズムが重なっていく。」(ibid. p.4=14~15頁)ともいうのである。こうして、再帰的近代化は、現代社会の複雑かつあいまいさをもつ変動過程を示すものであるが、従来の社会変動のカテゴリーである危機や社会変容や革命などと分析的に区別されながら、これらと重なり、符号させることができるともいわれている。

第二に、省察(reflection)と再帰性(reflexivity)の区別に関して、再帰的近代化という概念は、《自己との対決》を暗に意味しており、《省察》ではないとする。この省察と再帰性の区別は、reflexivity 概念を追究する者にとって、きわめて重要なわけであるが、ベックの場合には、省察は、「知識の増大や科学原理の適用」であるのに対し、再帰性は、「工業社会からリ

スクの社会への自立した、望まれないし、誰も気づかない移行」であり、「工業社会のシステムのなかでは——工業社会のシステムの有す制度化された判断基準から見て——対処したり同化することができないリスク社会のもたらす結果に、自己対決していくことを意味する」(ibid. p.6=18頁)としているのである。

すぐ続いて、「まさにこうした布置連関が、後に第二段階になると、逆に(公的、政治的、学問的)省察の対象になるという事実は、この省察を欠いた、条件反射的な移行メカニズムを必ずしも不明瞭にしてはいない。まさしくこうした抽象的省察が、リスク社会を生みだし、リスク社会を現実のものにしているのである。」(ibid. p.6=18頁)と述べられているところからみると、省察と再帰性の区別とその関係は、結局、次のように考えられているのではないかと思われる。すなわち、省察なき、条件反射的な移行メカニズム(そのメカニズムこそ reflexivity であり、それは省察なき条件反射的なものと考えられている)の結果に対して、reflexivity は自己対決する。この構造関係(布置連関といわれているが)全体に対して省察がなされるが、この省察を含む全体の進行が益々リスクを増大させることとなり、「リスク社会」を生み出し、それが、誰の目にも明らかな「リスク社会」を現実化せしめている、このように把握されているものと思われる。

ここで注目すべきは再帰性と省察の関係についてのギデンズとの違いである。ギデンズの場合には、省察は再帰性の基盤であるが、省察が省察を生み、たえず見境もなく働くところに再帰的モニタリングの特徴があるとみており、具体的には、社会の様々な次元で、また、様々な領域で現れるが、とくに専門家システムを中心とする抽象的システムに対して、一般の人々の知識の専門化による再帰性が働くところにあっ

た。そこでは、省察こそが先にあり、省察が省察を生み、複雑化していく社会のメカニズムを再帰性として捉えている。いわば、再帰性は省察を含んでいる。しかし、ベックの場合は再帰性の方が先にあり、それは「省察なき、条件反射的なもの」でそれによって惹き起こされる社会のメカニズムによる結果にそれ自身が自己対決する作用（それ自体も省察なき、条件反射的なものであろう）であり、省察はその後にくて、その全体に作用するが、その結果は「リスク社会」を生み、これがいわば悪循環しながら「リスク社会」の状況を進行させていると捉えられている。この「省察なき、条件反射的なもの」という再帰性の内容は、後述するブルデューの「無思考的な思考カテゴリー」としての reflexivity 概念と同じ次元の作用に焦点づけられているものと思われる点で、注目しておかなければならない。少なくとも、ここでは、再帰性は省察以前のところにあり、その後省察と関係しながら、社会の「リスク社会」への変動を解くキー概念になっていると思われること、そこにギデンズとの相違をみることができることを確認しておきたい。

しかし、産業社会が必然的に「リスク社会」へと変動し、もはや社会の全般的な領域で、それまでの判断基準では対処しえない重大なリスクが満ち溢れてくる状況に対して、ベックの理論はどう対処しようとするのであろうか。もちろん「リスク社会」論は、近代化を楽観的に捉えるのでも悲観的に捉えるのでもなく、近代化を徹底することによって、リスクを克服できると考えているのであって、その再帰的近代化概念は、それ自体が「リスク社会」を生み出したことを明らかにすると同時に、そのリスクを克服する道を見出すところにあるのである（ウルリヒ・ベック（1998）前掲訳書 468頁参照）。

その克服の方途は、「サブ政治」の創造と

「円卓会議」モデルとして示されている。サブ政治は、政治システムの外部にいる行為主体——専門的職業従事者集団や職業集団、工場や研究機関、企業の専門技術を有す知識層、熟練労働者、市民運動の指導者、公衆等——が社会計画を立案する舞台に出演することが許されていること、また、社会的集合的行為主体だけでなく、個々人もまた出現しはじめている政治的なものの形成力として、お互いに競合していくこと、の二点で政治と区別されるとされ（Beck, U. et al, op, cit. p.22=46頁）、「サブ政治は、『下からの』社会形成を意味している。」（ibid. p.23=47頁）とされている。

そして、近代化の結果、副作用や危険性を生む運命がもはや受け容れがたいものとなったとき、あらたな「両義性」に対して、その両義性を許し、両義性を可能にし、境界を超越していく、多面的な意味をもつシステム形成の問題が、今日最も重要になっているところから、コンセンサスをつくり出す方法として「円卓会議」モデルが提出されるのである。それは、従来の道具的合理性のモデルを捨て去り、専門知識の独占排除、管轄権の情報開示、意思決定構造の公開、部分的周知性の創出、自己立法と自己責任、等を重視する討論の場である（ibid. pp.29~30=58~59頁参照）。

こうしたことを通じて、ベックの主張するのは、「規則主導型政治」から「規則改変型政治」への、サブ政治を通じての政治的なものの再創造ということなのである。それは、「自分のいづく目標——経済成長と完全雇用、社会保障——のなかに見出す《現状維持的》政治の枠組みを捨て去るか、あるいは少なくともそれらの目標をさらけ出し、敷衍し、再考し、再構成していかなければならない」（ibid. pp.37~38=73頁）からである。それは、創造的かつ自己創造的な政治の展開であり、きわめて示唆深い提

案である。

なお、ベックのいう単純な近代社会は産業社会であるわけだが、それは国民国家と共存し、財 (goods) の配分を原理としているのに対して、「リスク社会」は第二のモダニティであり、国民国家を越えたグローバルな社会で、その原理は財の配分ではなくハザードや危険の、リスクの配分という「負の財」 (bads) の配分である (ibid. p.6=18頁; Lash, S. 1993, p.3)。ラッシュによれば、単純な近代は「保険原理」によって理解しうるが、それはとりわけ初期の産業社会段階の原理であり、福祉国家の社会保険がその例であるのに対し、第二のモダニティ段階の再帰的近代化の段階では、もはや保険原理は有効ではなくなったとベックは考えているのだという。複雑性と偶然性が支配し、計算可能なものが計算不可能にさせられてきたからだというのである (Lash, S., op. cit. p.3)。

#### (c) スコット・ラッシュの Reflexivity 概念

スコット・ラッシュは、ギデンズとベックの間の相違性より遙かに大きな相違性をもった reflexivity 概念を展開している。21世紀への変わり目における批判理論の必須の要素を、再帰的モダニティという概念的枠組の中にみようとしているのである (Beck, U., Giddens, A. and S. Lash (eds.), 1994, p.110=1997, 206頁参照)。その理論は、再帰的モダニティの理論の doubles (分身) という形で展開するものであるが、その基本的な性格は次の三点にある。

① 再帰性の新たな一連の構造的条件として《情報コミュニケーション構造》を主張していること。

② 再帰性の認知的領域よりも《美的》領域に着目し、個別的なもの、美的なものによってハイモダニティの一般概念を批判すること。

③ 美的再帰性概念を、さらに解釈学的な方

向に変換させ、《共同体》の存在論的基盤を解明しようとしていること。

以上の点である。

ギデンズとベックの再帰的近代化の理論における再帰性は、ともに自己再帰性を前提としつつ、不安や危険性をできるだけ少なくすることを目指しながら、「制度的再帰性」としての専門家システムに対しては、ギデンズは信頼を寄せているのに対して、ベックはそのシステムからの解放とそのシステムへの批判を主張している。これに対しても、ラッシュは、「このような作用と認知的なもの、個人主義に関する理論を創造的に打ち壊し、それにともないこの理論を、構造と美的原理、共同体に関する理論として再構築していきたい」 (ibid. p.119=221頁) としているのである。

まず、①情報コミュニケーション構造に関しては、ラッシュの再帰性に関する論の中では、「単純なモダニティにおいては、市民であることの責務が主に国民国家にたいして向けられていたとすれば、再帰的モダニティにおいては、その責務は、むしろ自己に、つまり、責任をとるという自己モニタリングにたいして向けられていく。法の前の平等や政治的権利、福祉国家における社会的権利に特徴的に示される単純なモダニティにおける市民としての諸権利は、再帰的モダニティのもたらす情報コミュニケーション構造の接近利用権に転換してきている」 (ibid. p.133=244頁) と述べているところにもみられるように、今日一般的な状況となっている個人主義的風潮、そこで説かれる自己責任の原則は、民主主義的な方向に進んでいる傾向を示すものとして多くの者に受け容れられながら、反面で、公的責任が回避されるとともに最も弱い立場の人たちが苦しむ結果となっているという現実が、モダニティにおける再帰性の、とりわけその情報コミュニケーション構造によって

いる側面を明らかにしてくれているのである。再帰的近代化は、新たな下層階級を生み出し、それは市民権の実質的な剥奪の問題ともなっていることも、ラッシュは、アンダー・クラスの例などを通じて論じているのである。

第二に、②の美的再帰性の点については、今日の消費者資本主義からなる日常生活では、「表現的個人主義」が一般化しており、その原理が美的再帰性とみる<sup>10)</sup>。それは、芸術の領域からくる本質的にはミメシスの的なものであって、概念的なものではない。また、それは、個別的なものに価値をおき、個別的なものによる普遍的なものに対する批判の形をとるのである。

この美的原理に基づく美的倫理は、「判断そのものにたいする美的なものの勝利であり、それは主体にたいする客体の復讐、つまり、同一性にたいする差異の報復である。」(ibid. p.143=262頁)ということになるが、こうした美的再帰性は絶えず反基礎づけを志向し、脱構築をしていく。その結果が、「諸々の統制形態が、偶然性の観点から脱構築されていくのである。それ以前の両義性の様式は、統制様式であったことが現実に示され、代わってその両義性の様式は脱構築され、さらにまた、と続いていくのである。」(ibid. p.145=266頁)という、まさにポストモダン的な状況が惹き起こされることとなるのである。それは、リオタールのいう漂流であり、ラッシュのいう「常習的脱構築」によって自分自身をも放浪の身に追い込んでいく時代状況にちがいないのである。

こうした状況の進行を背景にふまえ、その進行そのものの持つ意味を誤りなく捉えて、その時代の要請に即した解き方を示すことは容易ではない。少なくとも、ハーバーマスやベンヤミンのアレゴリー概念、アドルノの美学、リオタール、ローティ、デリダなどポストモダンあるいはポスト構造主義の方法等、とりわけ「脱構築」

の意味にもかかわって、ハイデッガーの実存哲学に遡ったその理論の追究、等々、踏まえなければならない理論、論理は多いだけでなく、いずれも難解のものばかりである。しかし、ラッシュは、これらの検討もした上で、再帰性の論理を追究しているであることを確認しておかねばならない<sup>11)</sup>。

第三に、③の解釈学的再帰性についてであるが、ラッシュは、上記のような状況の進行に対して、解釈学的方法を「猜疑の解釈学」から「回復の解釈学」に変換することによってこの状況をめぐる問題を超克し、新たな「文化的共同体」の可能性を示そうとするのである。その場合の「共同体」は、しきたり、慣習に基づく、また、コミュニケーションの合理性による生活世界の空間の拡大などを基盤とし、とりわけ、これらに合意されている「先行する判断」や「前理解」に基づきながら、「習わしの共同体」として築かれていくものと考えられている。

その場合の共同体は、共有された《利害関心》のことをいうのではなく、共有された《特性》のことをいうのでもなくて、「何よりも、まず、共有された意味の問題である」(ibid. p.162=296頁)とする。ラッシュの見解では、ギデンズやベックの再帰性は認知的再帰性であり、アドルノやニーチェの場合は美的再帰性であったが、認知的再帰性による個人化あるいは個人主義への傾向と、美的再帰性による個人化あるいは表現的個人主義の傾向は、「私」から「われわれ」を導き出し、個人から共同体を導き出すことに失敗しているとし、「共有された意味の崩壊が生じた時にのみ、人間は互いに『主体』になっていく」(ibid. p.151=277頁)、その主体から新しい共同体が、生活世界の中に生成されてくる根拠をとりおさえ、個人主義的傾向と共同体志向とのまさにアンビバレントな状況に対して、「回復の解釈学」によって解こうとす

るのである。

この回復の解釈学の追究によってラッシュは、reflexive sociology と文化的理論の共通の根拠を回復させることをねらっているのであって、それは結局、「差異的合理性」の主張であり「もう一つのモダニティ」の追究となっている (Lash, S., 1999) のである。「差異的合理性をもった別のモダニティは根拠なき根拠の問題である。それは、脱構築と回復との同時的な運動である。同時に回復し、脱構築する。それはまた、確実な一貫性の根拠づけられた一つの空間でもある。モダニティの運命は、永遠に根拠を回復することであり、また、永遠に根拠を脱構築することである。モダニティの運命は、根拠なき根拠であると同時に根拠なき根拠でもあるのだ。」(ibid. p.6 傍点はイタリック) というのである。それは、デリダのいう「差延」に他ならない。だから、*Another Modernity; A Different Rationality* (『もう一つのモダニティ：差異的合理性』) における合理性は、現在一般的になっている合理性とは「異なった合理性」には違いないが、「差異」のもつ意味を認め、「差延」の動きの合理性を認める方向で動いている時代に即し、それ故、一人ひとり、一つひとつの違った存在を認めることの合理性であろう。それこそ、根拠なき根拠として、根拠ありとしてきた従来の合理性を脱構築するが、それ自体の根拠もいずれの日にか脱構築される運命にある。にもかかわらず、この根拠の脱構築と回復との繰り返し、永遠に続く運命にあることを承知の上でそこにコミットしていく。そのことのもつ合理性、すなわち、「差異的」合理性であろう。ともかくラッシュは認知的再帰性を批判し、美的再帰性をも越えて解釈学的再帰性に到達している (Beck, U., Giddens, A. and S. Lash, op. cit. 1994, pp.158~159 Table 1=290頁表1 参照) といえるわけである

が、その境位は、デリダの「差延」の境位であり、エスノメソドロジーのラディカル・リフレクシヴィティの位相と共通の境位ではないかと思うのである。

この境位は、しかし、ラッシュの場合、文化的共同体の構築の根拠となる「習わし」とかかわって、ブルデューの「無思考的な思考カテゴリー」という reflexivity 概念をきわめて高く評価して、ブルデューの社会学は「無思考カテゴリーの社会学」であり「存在論的基礎づけの社会学」である (ibid. p.155=284頁) とし、また、再帰的人類学と社会学あるいは再帰的人間科学を高く評価し、その再帰性概念は、ベックとギデنزの再帰性概念の対極に位置させているのである。

なお、ベックとギデنزにとって「リスク」概念こそが主要概念であったのに対して、バウマンの場合は「偶然性」(contingency)、「両義性」(ambivalence) がその主要概念であって、ラッシュは、屢々、再帰的近代性に関する現代社会学者とアンビバレンスの社会学者とを対比的に論じている (Lash, S., 1993)。バウマンは偶然性、複雑性、差異性、過剰性、流動性、等の言葉で語られるポスト・モダンの状況に対して、それらをそのまま認め、それとつき合い、アンビバレンスと和解しながら、アンビバレントな世界での生き方を学んでいかねばならないことを強調しており、注目すべきところである (Bauman, Z., 1991)。しかし、ラッシュは、回復の解釈学によって、バウマンの境位から、〈共同体〉形成へと向かうのである。

### 3) ピエール・ブルデューの Reflexive Sociology における Reflexivity 概念

ピエール・ブルデューの Reflexive Sociology については概略述べたことがある (渡邊 1996) ので、ここでは、とくに再帰的近代化論



との関係で、ブルデューの reflexivity 概念の特徴について再考し、とりまとめておくにとどめる。

ブルデューの reflexivity の第一の特徴は、対象構成にかかわるものであることである。すなわち、基本的には、対象となる経験する主体における「無思考的な思考カテゴリー」といわれるものに基づきつつ、対象構成する主体の対象構成の行為そのものにおける reflexivity であり、次第に拡大して、集合的、科学的認識のあり方に及んでいくのである。ブルデューの共同研究者ワッカントによれば、「ブルデューの場合、その reflexivity には、エスノメソドロジーや現象学的社会学やグルドナーに支持されてきたヘーゲルの自己意識あるいはエコロジカルなパースペクティブでなされる主体に対する主体の reflection（内省または省察）は含まれない」とされており、「それは、『思考可能なものを制限したり、思考を前もって決定する無思考的な思考カテゴリー』の体系的な探求を伴い、同時に、社会研究の実践を主導するものである。」（Bourdieu & Wacquant, 1992. p.40）といわれている。ここにいわれる「無思考的な思考カテゴリー」<sup>16)</sup> (the unthought categories of thought) は、ラッシュが高く評価しているものである。ただし、ラッシュは「無思考なカテゴリー」(the unthought categories) としているが、正確には「無思考的な思考カテゴリー」というべきものと思われる。確かにブルデューの reflexivity の性格について、ワッカントは、引き続いて、「それが要請する『回帰』(return) は、経験する主体を越えて、学問領域の組織的、認識的構成を包含するように拡大する。対象構成の行為そのものにおいて、一貫して吟味され、中立化されなければならないのは、理論や問題や学者的判断のカテゴリーに埋め込まれている集合的・科学的無意識である。したがっ

て、reflexivity の主体は、結局、社会科学の界全体でなければならないこととなるのである」（傍点は原文でイタリック体、ibid. p.40）と述べられているところからみれば、「無思考的な思考カテゴリー」は、結局、集合的・科学的無意識ということになるのであろうから、「無思考なカテゴリー」といってもよいのかも知れない。しかし、それは誤解を招きかねないように思う。なぜなら、「無思考的な思考カテゴリー」は、いわば思考と無思考の境界領域にあるが、あくまでも思考のカテゴリーに属するものというブルデューの慎重な配慮を読みとることができるように思うからである。それは無意識的であろう。しかし、単なる反射的なものではなく、無思考では勿論なくて、思考カテゴリーの中の様々な水準のものが身体化され、しかも思考と無思考の境界領域に位置づいていて、恐らくすべての思考の、したがってすべての理論と実践の、根源と考えられているものと思われるのである。それは、ブルデュー社会学で「概念なき知識」と関連していわれる「境界感覚」（Bourdieu P., 1979, p.549=1990 II : 345頁）の重要性の根拠を示すものであり、「身体化された分類図式」(ibid. p.191 graphique 8, = 1989 I : 262頁 図8) として、ハビトゥスの前段階の条件をなすものでもあると思われる。

またさらに、こうした「身体化された分類図式」は、ラッシュの主張する美的原理に基づく美的判断力に通じるものを確かにもっていると思われる点でも注目すべきものである。「実践の論理の差異特性 (differentia specifica) を見逃すことのないようにする」ということ（Bourdieu & Wacquant, 1992. p.39）は、個別性に注目しつつ、そこからの「社会的判断力」（Bourdieu P., 1979=1989/1990の副題）を問うものでもあるからである。

また、この「無思考的な思考カテゴリー」は、

ブルデューにおいても、ラッシュのいうように、「慣習や先在傾向」を形成する源として重要な意義をもつものであって (Beck, U., Giddens, A. and S. Lash, 1994. p.156=1997. 285頁)、その慣習や先在傾向は、ブルデュー社会学のキー概念であるハビトウス、ディスポジション (性向) として概念化されることとなるわけであるが、それは規則と対置され、レヴィ=ストロースの構造主義を批判する論拠に踏まえられ、「親族の構造」に代わって「婚姻戦略」として把握されることにつながっていくのである (Bourdieu P., 1977, pp.29~30, およびピエール・ブルデュー, 1990. とくに28頁参照)。

第二の特徴は、研究主体においては、対象における reflexivity に基づき、自らの研究態度、研究上の立場に対して reflexive でなければならないという意味での reflexivity である。再びワッカントによれば、ブルデューは社会的な見方には三つのバイアスがかかっているという。その第一は、階級、ジェンダー、エスニシティなどによるバイアス、第二は、権力の場に起因するアカデミックな界からくる分析者の知的バイアス、第三は、実践の論理を互解しかねない知識人的バイアス、の三つである。したがって、社会学者は、研究の内容を規定している枠組 (エスノメソドロジーでいわれていた枠) を問題として意識し、これに対処しなければならないのである。

リンチの分類では、ブルデューの reflexivity は方法論的 reflexivity の中の (4a) 「reflexive な客観化」として位置づけられていた。しかも、(5b) 「ラディカル reflexivity」はブルデューとはちがって「客観化の実践そのものを疑問視する」とも述べられていたのであった (前述のリンチの分類を参照されたい)。しかし、注意しなければならないのは、ブルデューにおける reflexive な客観化は、主観的な理論とその枠

組を客観化することはいうまでもないが、客観的であると思ひ込み、客観的であることに疑いも差し挟まないできた理論およびその枠組をも客観化するのであり、その上、そのように客観化したもの、およびその客観化それ自体を客観化する (「客観化を客観化する」) ものであることである (Bourdieu P., 1980, chapitre 1, pp.51~70=1988. 第1章, 45~64頁参照)。客観化の作業自体が、まさに reflexive に何重にもなって進行する可能性があるものであって、それをリンチは「二重の客観化が起こる」と説明しているのであろう。いずれにせよ、こうした客観化は、ラディカル・リフレクシヴィティがもっていた螺旋運動を秘めたダイナミックな動きとしての reflexivity と、むしろ共通であるといえるであろう。

さらに注目すべきは、こうした客観化は、対象との距離をとることであり、退くこと (retire) である。この retire することは、一度は参画し、コミットするが、そこから retire することであって、その反復はまさに reflexive であるわけである。それと同時にこの客観化ということは、認識の社会的条件を問い、その客観化でもあって、そのためには同じ対象に何回も立ち返らなければならない、立ち返る度に (つまり、反復の回数を重ねる毎に) 客観化の程度は高まるのである (ibid. p.7=1~2頁参照)。

ブルデュー社会学に独特な誤認=承認の論理の問題や象徴暴力と支配の論理<sup>19)</sup> が貫いている歴史的、社会的条件の中で、戦略・闘争をめぐる論を展開し、グローバリゼーションそのものをこれと関係づけながら反グローバリゼーションを主張する (加藤晴久, 2001 とくに, 6~32頁) のも、こうした reflexivity の然らしめるところである。

ブルデューの reflexivity の第三の特徴は、個人としての研究者の問題というよりは、集合

的・科学的な界の問題であり、また、認識論的安全性の攻撃ではなくて、認識論的安全性を強固にするためにあることにある (Bourdieu & Wacquant, op. cit. pp.36~37)。それは全般的な社会学的方法的立場にかかわることであり、「社会学者のメチエ」(渡邊、1996参照)の基礎に横たわる重要な reflexivity のもつ性質でもある。すなわち、ブルデュー社会学は、結局、その根底に横たわるものは reflexive な「無思考的な思考カテゴリー」であり、それを含んだ「実践感覚」である。これに根ざした「実践の論理」を、ワッカントが賞賛するように、ブルデューは発見し、実践的理論を形成する。その実践的理論を理論的理論に対峙させ、理論的理論に組み入れることによってその変質をはかるという、ブルデュー社会学全体の reflexive な理論的实践が、社会学者のメチエとして成立していくのである。このとき、実践の論理を発見せしめたのは、転轍機としてのインクルージョンであるとワッカントはいうのであるが、だからこそインクルージョンは、社会学をして、混乱し、散乱し、收拾がつかないかにみえる現実に分け入って、インテグレーションの役割を果たすことを可能にするものであるわけである。そしてそれは ritire するからであるというのである。退くことは、すでにその前に、分け入ったことを前提にする。まさに、回帰過程である。退き、距りをおき、客観化することは、「参与的客観化」(Participant Objectivation)といわれ、参与観察とは訳がちがうのである。その方法をもってする実証的な調査研究が「社会分析」(socio-analyse)であり、そこでは調査者の reflexivity が、反省的反省 (réflexivité-réflexe) という形で問われるのである (ピエール・ブルデュー、1999. 参照)。それは、理論的実践の具体的な展開であり、『世界の悲惨』(Bourdieu, P. et al., 1993)として結実し、注

目されてきたのであったが、悲惨の実態を明らかにしうる力は、他ならぬブルデューの reflexivity であり、そうした研究を通じて、社会のインテグレーションを着実に進める道を歩みつつあったのだと思うのである。

#### (4) 人間社会の全体的に Reflexive な 構造関連と福祉社会学研究の課題

以上、検討してきた reflexivity 概念について、総括的に、これら多様な意味内容をもつ reflexivity 概念の異同を整理するとともに、〈人間社会〉の全体的に reflexive な構造連関はどのように把握されるかについて考察するとともに、それとの関係で、福祉社会学的方法的課題についてみておきたい。

少なくとも本論文で検討した reflexivity をめぐる諸理論において共通にみられる点は、およそ次のような諸点といえるであろう。

第一に、reflexivity とは、焦点とする何ものが回帰するものであることである。実践も理論も、所詮は人間の思考と思考しながらの実践である限りでは自己自身にかかわることを巻き込みながらの回帰であるが、同様に、社会の様々なレベルで起こる reflexivity は、そのレベルにおけるシステム自体ということになる。

第二に、回帰は、結局、元のところに戻ってくるのだが、その理由は、元のところが問題だから出て行く、出て行った先の世界と元の世界とのちがいに着目すること、つまり、その意味で社会世界を「二重性構造」として捉えていることである。現実の「構造」に対して、地下の〈構造〉あるいは理想状態としての〈構造〉、少なくとも「構造」とは異なった〈構造〉を認識し、この対立関係すなわち二重性構造を暗黙の前提にしているということである。ブルデューの場合では、社会世界の底に埋め込まれているユニバースの二重性である (Bourdieu, P. &

Wacquant, L. J. D. op. cit. pp.7~11)。

第三に、この事態の把握の中で、何らかの意味で、グルドナーのいうように、「橋」たらんとしていることである。換言すれば、橋を架ける、架橋こそ、reflexivity の営みである。それは、いわば系列的なるものの基本的な対立の中で、その間に架橋の任を担うことを自らの課題にするのである。しかし、架橋を意図せずに、現実の構造の問題性を批判し、脱構築に脱構築を無限に繰り返すのではなく、いつかは、架橋のところへ戻ってくるのである。

第四に、その架橋の根拠をおさえようとしていることである。根拠のあいまいさ、その疑わしきは承知の上で、なお根拠を求めようとする。ラッシュのように、根拠の脱構築の末に〈根拠なき根拠〉に辿り着く。しかし、それも根拠なのであって、それは再帰過程なのである。

第五に、この根拠を求める認識の仕方と関係するが、時代認識にある種の共通性がみられることである。すなわち、「現実」を現実たらしめてきた歴史の過程に対して、未来は現在のままの延長で良いとは考えていないのであって、現実を越える必要があると共通に考えていることである。今日、益々複雑性、偶然性が支配的になっている現実に対して、それと共に生きる道を探るアンビバレンスの社会学とはちがった仕方、何らかの形で現実的に対処しようとしているように思われる。

しかし、以上のような共通性も、詳細にみれば、論者によって違いがあり、それ故、その reflexivity 概念にも違いが生じてくる。それは、ラッシュのいうように、反省する主体には個人、社会階級、全体社会がありうるし、客体は諸規範、美的、倫理的な象徴的なもの、あるいは知識の生産物でありうる、また反省の媒体は意識か言語である、等々のためであろう（スコット・ラッシュ、1990、368~369頁参照）。

しかし、ブルデューのいうように、個々の研究者というよりは界の、しかも無意識の問題だとすることもあるわけである。考え易いのは、便宜的ではあるが、①空間的広がり、個人を中心とする生活レベルか、コミュニティレベルか、地方・地域レベルか、全体社会レベルか、世界（人類社会）レベルか、——あるいはミクロレベルか、マクロレベルか、それともメゾレベルか——で、②時間的に、時代認識が現代をモダンとみるか、ポスト・モダンとみるかで、③方法的に、ミクロからの上向の方法をとるか、マクロから下向する方法をとるか、でみたらどうであろうか。

まず①の点で、エスノメソドロジーは、明らかにミクロレベルに焦点がおかれており、最も身近な日常生活における reflexivity の根っこをおさえようとしているといえるであろう。もちろん、差別なき、信頼しうる人と人との関係の創造をめざし、そのためのコミュニケーションのあり方を問い、共生、共同の真実を突きとめ、研究者はもちろん、メンバーとして参画する者すべてを巻き込んで、reflexive に〈共同社会〉の創造をめざしているといっていよいであろう。ブルデューも、「無思想的な思考カテゴリー」を根源としつつ、実践感覚、実践の論理を見出し、それらに基づいて実践的理論を形成する限りでは、ミクロレベルにおける reflexivity の追究といっていよいだろう。このブルデューの対極にあるのがギデンズとベックであろう。もちろん、ギデンズの構造化理論の「構造の二重性」は行為と構造の循環であり、ミクロレベルが基礎ではあるが、近代化論になると、むしろ世界（人類社会）に焦点は移され、人類社会の危機とその克服のビジョン、そこに至る道（「第三の道」）の提出とそれをめぐる議論が展開されているのは、マクロレベルに力点がおかれているとみてよいであろう。また、ベックの

場合は明らかに「リスク社会」論とそれに基づく reflexivity の問題であって、マクロレベルに焦点がおかれているとみてよいであろう。これに対して、ラッシュは、その美的再帰性から回復の解釈学に基づいて〈文化的共同体〉の形成を志向しているところから、メゾレベルに焦点をおいていると言えよう。

②の時代認識の点では、ギデنزとは明らかにモダニティの徹底化とみているのに対してラッシュはポスト・モダニティとみている (Giddens, p., 1990, p.150 TABLE 2=187頁表2および Beck, U., Giddens, A. and Lash, S. (eds.) 1994, pp.158~159 Table 1; p.197=290頁表1; 357頁参照)。ベックはもう一つ別のモダニティというが、ポスト・モダニティに近いといえるだろう。

③の点であるが、ブルデューは明らかに、ミクロレベルから上向し、反グローバリゼーションや市場独裁主義批判 (Bourdieu, P., 1996a=2000) に至る象徴支配と戦略・闘争論を展開してきている。ギデنزとは「生きることの政治学」を、また、ベックは「サブ政治」の創造や「円卓会議」を主張し、メゾレベルに近く下向してきている一方、ギデنزとは『暴走する世界』を問題にし、ベックは『世界リスク社会』を問題にしていることにみられるように、さらにマクロな問題を追究している (アンソニー・ギデنز, 2001および Beck, U., 1999)。エスノソドロジーは、ミクロレベルの追究に終始しているといつてよいのではないと思われる。ラッシュは、メゾレベルから解釈学的再帰性論によって、一旦は下向し、ブルデューにおける「無思想的な思考カテゴリー」を重視するところに辿り着き、そこから逆に、〈共同体〉形成を主張するに至っているが、それはメゾレベルでのきわめて重要な主張といえることができよう。

最後に、グルドナーは、②の点で、モダニティ

の中で、まさに方法論的に reflexivity を提唱し、時代の推移を先取りしていた感があるが、上記したように、その後のすべての reflexivity 概念は、グルドナーの提唱した線に沿って「架橋」の役割を、それぞれのレベルで果たそうとしてきたとみることができよう。主要な橋は、ミクロ、メゾ、マクロの各レベルで架けられつつあるわけだが、それぞれが上向、下向の運動を繰り返えしながら (ただし、エスノメソドロジーは一貫してミクロレベルの架橋) 架橋の努力を積み重ねているといった趣きである。その全体的な連関構造は、これら架橋のすべてが螺旋運動なのであり、それらを一つにつなぐのもまた大きな螺旋運動としてある。つまり、この巨大な螺旋運動と、その螺旋の一部を部分的に分担するいくつかの螺旋運動として把握されるように思うのである。reflexivity は、そもそも、自由と必然のパラドックスにもかかわらず、そこに統体としての人間の〈自由〉を確保せんとするのであり、そのような人間の〈自由〉の確保を現実の社会状況の中で自覚し、行動に移すことで創造されていく〈社会状況〉、その中で規定されつつ再び、〈自由〉の確保の実践に帰するという、この循環すなわち reflexivity が、人間と社会の二元論的な対立関係を越えて、一元論的な〈人間社会〉にもたらそうとする運動なのだから、全体の構造連関が、reflexive な構造連関となるのは、むしろ、当然の結果なのである。

社会学の専門分野の一つとして福祉社会学が成立するためには、社会福祉への社会学的接近の理論的・方法的要件として、①全般的な社会学、社会科学の理論の動向を踏まえて、その基本的な方法を適用するとともに、その方法の深化、発展に逆に寄与しうるものであること、②同時に、その理論的發展に見合った思想史的根

拠を踏まえること、③さらに、それらの理論および思想の発展に見合った生活の理論を基礎とすること、の三点を考えてきた。

このうち、③についてのとりまとめから始め、生活については『生活の構造的把握の理論』（渡邊，1996）としてとりまとめた。①と②についてはいくつかの機会に、部分的にまとめはじめた（渡邊，1998a, 1998b）が、中断している。とくに、①については、社会学理論自体の発展し続けている現状を踏まえることが容易でないこともさることながら、現実の社会福祉の近年の激しい変化もあって、その実践の領域における問題の解明と理論との整合性をはかることができないままに、とりまとめを延ばさざるをえない状態であった。とくに、ブルデューの社会学は、「超領域の人間学」と謳われるように（ピエール・ブルデュー，1990参照）、今日の社会の問題は同時に人間の問題であり、人類の問題でもあって、世界的な視野の中で考えなければならないだけでなく、その解き方をも含むものでなければならないという、方法的に困難な問題を抱えており、社会福祉問題も例外ではないわけである。他方、現実の福祉問題は、誤認＝承認の問題が次第に明らかになってきて、支配の論理に翻弄され、厳しい情勢の中で、苦しみ、痛みを一身に背負わされている人々の、まさに「悲惨」な状況が突きつけている要請に、理論はどう応えるべきなのかが問われている。

こうした問題に対して、社会学における reflexivity 概念に焦点をおく研究は、真摯に応えようとしていることは明らかであり、最も身近な日常生活レベルから地域社会、地方、全体社会、そして人類社会に及ぶ社会の各レベルにおける reflexivity は、それぞれのレベルで、現実の問題を認識し、その問題の解決を求めて、脱構築を通じて厳しく既存の構造を批判することで、いわばそこから一旦離れはするが、再び

そこに帰ってくるという reflexive な動きをする。それは、ある意味では、現実と理想の間の架橋であるが、常に、現実の側からの架橋の営みである。各レベルにおける社会学の活動は接合される必要があると思われる。そのためには、相互の reflexivity が共有されていかなければならない。もし、それが可能になったときには、多分、エスノメソドロジーでいわれる螺旋運動が全体の運動となっていくであろう。ただし、螺旋の向きや方向性が一致していなければならないこと、いうまでもない。

さて、社会福祉への接近を課題にする福祉社会学は、まずそれ自体が reflexive でなければならない。とくに当事者たちの生活という〈実践領域〉にアプローチするとき認めざるをえなくなるのは、その〈実践領域〉における reflexive な動きであり、そこにみられる〈実践感覚〉、そして確かにその〈実践感覚〉に根ざした〈実践の論理〉が息づいていることである。そこに参画し、一旦そこから退き（ritire）、またそこに向い、そして帰ってくる。この往復、循環によって、研究者、参画者は、たとえ部分的ではあっても、当事者の〈実践感覚〉、〈実践の論理〉、を共有し自らの実践感覚、実践的理論を形成し直していく。reflexive なプロセスを辿るのである。

これがベースであることをエスノメソドロジー研究もブルデュー社会学も教えてくれている。それに立脚して〈共同〉〈共生〉が成り立つことは、美的再帰性の論理に導かれながら、なお統合（integration）に向わんとする解釈学的再帰性の然らしめるところであろう。美的再帰性から解釈学的再帰性への転換は、エスノメソドロジーにおける referential reflexivity のラディカル化ときわめて類似している。だから、その両者は接合しうる可能性があるのではないか。

いずれにせよ、最も身近なところでの reflexivity 概念は、福祉社会学研究の〈当事者性論〉<sup>20)</sup>と共通であること、したがって、相互の協力関係によってお互いに寄与しうるところは非常に大きいのではないかとと思われるのである。

次に〈共同体〉形成の論理は、社会福祉の領域では〈地域福祉〉として、共通の視点と方法を可能にするとと思われる。ただし、「地域福祉の時代」といわれている中で、地域の多様な条件のちがいを、ローカルな視点で、〈差異的合理性〉に基づく〈再生〉としての〈共同体〉形成の課題としてである。

再帰的近代化論でいわれる人類社会全体の危機の認識とその危機克服のためのシステム構想という reflexivity は、今日の人間社会にかかわるすべての者が現実の問題として考えなければならない課題であり、社会福祉の概念の中に人類社会の福祉を最広義のものとして設定するならば、福祉にかかわる研究こそ、その二重性の中で、危機克服のための道を積極的に求めるものでなければならないであろう。そのために、再帰的近代化論から学び、他の領域の研究活動との連帯によって、福祉の道を誤ることのないようにしていかなければならないであろう<sup>21)</sup>。

リスク社会論の背景にある時代認識も重要である。リスクとリスクに対応した保険原理との関係は、具体的な政策の根本をなしているからには、その根本の保険原理が時代の動きに合わないとしたら、リスクとの対応関係そのものがまさに reflexive な研究によって明らかにされる必要がある。しかもグローバル化している社会状況下で、国民国家の限界も含めてのことではなければならないであろう。

国民国家の下位システムとしての地方や地域にかかわって、再帰的近代化論の示唆する如く、ベックのサブ政治の創造の課題は、福祉の世界

も同様であろう。否、福祉の世界だからこそ、そのサブ政治のさらにサブシステムとしての地域における〈共同体〉形成に根ざした形で、サブ政治を「下からの」というベックの主張に沿って転換せしめることが含まれるわけで、そのような形で、福祉研究は reflexive な研究に貢献することができると思われる。

かくて、社会の各次元における reflexivity 概念は、概念間のずれは埋めるべくしてある。けだし、reflexivity 自体がもっている螺旋運動は、最も身近なところから世界全体に至るまでの社会の各次元を通して、全体としての螺旋運動を繰り返すことではじめてそのずれは埋められていくであろう。この全体の螺旋をつなぎうるものとして福祉はあるはずである。しかし、同時に、福祉は現実を果たしてそのような福祉になっているか否かを、絶えずすべての次元で自己点検しなければならない、まさに〈reflexive な福祉〉でなければならないであろう。この〈reflexive な福祉〉の運動の根拠、その運動の始源となるべきものは、他ならぬ〈実践領域〉における当事者であり、とりわけ受苦者（拙稿、1998a, 1998b を参照されたい）であり、人間と社会の問題性を一身に背負わされて生き抜いている人々であって、理論と思想と生活現実の結節点に立つ、福祉の原点ともいべき人々の生そのものであろう。

## おわりに

福祉社会学を構想し、その方法を確立しようとして、福祉社会学的方法的基礎であるべき社会学の方法を reflexivity 概念の追究のなかにみて、本論文で検討してきた結果、多くのことが得られた。まだ十分とはいえないが、難解な理論も、その追究の過程に即してみれば、そこにはある種の再発見といってもよい貴重な考えのあることが理解でき、その方法を基本的な枠

組、方法として福祉研究に生かし、また、逆に、福祉の領域の研究からその一層の整備に寄与することの可能性と重要性を確認することができたように思う。

とりわけ、ミクロレベルでは、ブルデューの「社会—分析」の方法を従来の社会学的調査研究に接合することで、調査研究は、まさに〈知と感受性と魂の深さ〉の領野（見田宗介，1997，163～165頁）としての福祉の領域に適用しうようになり、一層強大な力を発揮することとなるであろう。

ミクロなレベルでのエスノメソドロジーの方法と「社会—分析」の方法の接合は、福祉という内実をもって入ることによって果たされうように思われる。もし、それが可能になれば、エスノメソドロジーと「社会—分析」の手法は、少なくとも以前よりは大きな力となって、福祉の現実の誤りを修正し、真の福祉に発展していくことに貢献できることとなる。

こうした役割を果たしながら、現実の福祉の世界での誤認＝承認の問題を解き、地域における〈共同性〉の発展に、そして、〈下からのサブ政治〉の創造と発展に寄与しながら、国民国家のレベルでは、政策・制度・実践の体系から支配の論理、暴力の論理を放逐し、新しいもう一つの、差異的合理性が一般に受け容れられるように、ひいては、世界、人類社会の平和＝幸福につながっていく、そういうグローバリゼーションに即した福祉のあるべき姿を追究していくこと、これが社会学の一分野としての福祉社会学の、また、〈人間社会〉の学としての社会福祉論の使命であると考えるのである。

（注）

- 1) O'Brien, M. et al. (eds.) 1979, 「ジャガーノート」については、Giddens 1990=1993, とくに、第V章を参照されたい。

2) reflexivity は「反省性」、「再帰性」、「相互反映性」、「リフレクシヴィティ」、「リフレクシビティ」などと、また reflexive は、「反省的」、「反省の」、「自己反省の」、「再帰的」、「リフレクシヴ」など、様々に訳されて使われてきた。本論文では、それらの違いを越えて、その概念内容をいかに捉え、その意味と意義をいかに理解すべきかをねらいとするため、それぞれの訳語で論じられている文脈に言及するときには、そこで使われている訳語を使うが、それ以外に一般的に論じるときは、敢えて英語の reflexivity 又は reflexive をもって表記することとした。

3) これはガーフィンケルの「期待破棄実験」といわれるものである。「省察」(reflection) によって、日常生活の中のあたりまえのことで、見えるけれども気づかれていない (seen but unnoticed) が期待されている、その奇妙さを明らかにするためのものである。(Garfinkel, 1967, pp.36～38; アラン・クロン, 1996, 114～115頁; ガーフィンケル他, 1987, 297～328頁参照)

4) このラディカル・リフレクシヴィティは、アッシュモアの場合 (Ashmore, M., 1989 とくに chapter 4)、著書、インタビュー、手紙などを用いながら想像上の対話も交え、6段階の検討基準によって分析し、結局、終わりのない対話に導いていく。また、ウルガーの場合 (Woolgar, S. (ed.), 1988) は、自分で編集した論文集のすべての論文の終わりにリフレクション (reflexion) というものを設けて再考する形をとっている。これらは、それ自体、彼らの研究を特権化しようとするものではなく、むしろそれまでの特権性や合理的思考を崩そうとするためと思われる。ポルナーは、これらの方向性を評価しつつも、回帰するという reflexivity の方法を強調していることは注目す



- べきことに思われる。
- 5) ポスト構造主義のフーコーやデリダの思考方法を誤りなく理解することは容易でなく、誤解を招いていることが多いように思う。とくにデリダの「脱構築」や「差延」の概念はきわめて重要であるにもかかわらず、そのような傾向があるように思われる。少々拙著で検討したことがあるので参照されたい(渡辺, 1996)。また、後述のラッシュの reflexivity と関係が深いので、本論文(3) - 2) - (c) も参照していただきたい。
- 6) 「差延」(differance) 概念およびジャック・デリダの思想については、拙著(渡辺, 1996) 第四章、第2節、8(259~270頁)を参照されたい。
- 7) 拙著(渡辺, 1996) 第四章、第4節、2(300~310頁)を参照されたい。また、中西正司「自立生活センターの誕生」(全国自立生活センター協議会, 2001, 33~40頁)も参照されたい。
- 8) 知的障害者の中には「ことば」の話せない者がいる。しかし、養護学校での経験や地域の障害者との関係を通じて、彼らにも「言語」はあり、その言語によるコミュニケーションによって、彼らの「世界」が出来ているものだという確信がわれわれにはある。その人たちの言語によるコミュニケーション、それによって成り立つリアリティを排除した皆川の会話分析は疑問たらざるをえないわけで、好井の批判のとおりであろう(好井, 1999, pp.90~91; 皆川, 1993)。
- 9) 「解釈定理」は、「訳解定理」とも訳されてきた。(Garfinkel, H & D. L. Wieder (1992), とくに pp.187~189参照。また、皆川, 1993 および好井, 1999参照)。
- 10) reflexivity の考えは、グルドナー以前にもあって、例えばデュルケームの集合意識やパソンズのパターン変数の中にもみられるともいわれている(cf. Lash. S., 1993)。
- 11) 例えば、「自己反省」という訳語は、倫理面が強調されすぎる傾向があるために、新しい科学的記述の特徴としての意味合いからズレていると考えた方がよいという指摘がある。(兼子一, 1998, 16頁[注] 5参照)。
- 12) 社会成員(メンバー)という概念は自然言語の習熟を意味するが、「社会的能力(コンピタンス)を『自然に』提示する人間のことである」(アラン・クロン, 1999, 61~64頁参照)とされている。
- 13) 原資料は国連のUNRISD(国連社会開発研究所)の1995年5月のDiscussion Paperである。全頁に抹消線が引かれているが、その理由はわからない。しかし、それは、デリダのバッテン印と同じ意味ではないとしても、reflexiveな表現とみるのは解釈のし過ぎであろうか。
- 14) external risk は「外在的リスク」、「外部リスク」、manufactured risk は「工場生産されたリスク」、「人工リスク」と訳されてきたが、前者は自然災害等であるのに対して、後者は人間の活動自体の結果として惹き起こされたリスクのことを指すから、ここでは「外部的リスク」、「生産されたリスク」としておく。(アンソニー・ギデنز, 2001a インタビュー4, 148~185頁; 2001b, 第2章, 48~76頁参照)
- 15) life politics(「生きることの政治学」と訳されている)は、「すべての人のために、満ち足りて納得のいく生活を実現しうる、つまり、『別の人たち』など存在しないすべての人びとのために、そうした生きることの可能性を促進させようとする徹底的な社会参加をいう。」が、ギデنزはそれと「解放の政治学」とが結びつく必要があるとして、ユートピア的現実主義を主張している。(Giddens, A., 1990, pp.154~158=1993, 192~197頁参照)
- 16) ポストモダンの状況は、組織資本主義

(organized capitalism) が終焉し、消費者資本主義 (consumer capitalism) として存在するようになったという状況認識が前提となっている (Lash, S. and J. Urry, 1993)。

- 17) デリダのポスト構造主義については、フーコーやドゥルーズのポスト構造主義とともに、ブルデューの reflexive sociology の背景の意味もあって、拙著の中で検討したことがある (渡邊, 1996参照)。その他の人たちの所論も、福祉の思想史的根拠となるものでもあって、きわめて重要であるが、機会を改めて論じることとした。

- 18) 「無思考的な思考カテゴリー」の原文は、Wacquant, L. J. D. の執筆によるのだが、Wacquant 自身は Bourdieu の教授就任記念講義 *Leçon sur le leçon* からとっている (Bourdieu, P., 1982, p.10)。それによれば、les catégories de pensée impensées であるから、Wacquant の英文は正しいが、なぜか Lash は *unthought categories* だけにしているのである。

- 19) 誤認=承認の論理および象徴暴力と支配の論理については、Bourdieu P. et J-C. Passeron, 1970, livre 1 pp.13~84=1991, 第 I 部 13~97 頁; Bourdieu P., (1980) p.243=1988上, 232 頁; Bourdieu, P., (1984) pp.141~142=1991, 179 頁; Bourdieu, P., (1987) pp.35~36, p.55=1988, 43 頁, 70~71 頁; Bourdieu, P., (1996) p.16=2000, 24 頁; ブルデュー社会学研究会, 1999, 3~28 頁, 121~124 頁; などを参照されたい。

- 20) 社会福祉の理論の中で、「当事者主体論」は注目すべき理論であるが、筆者は、その理論のもつ問題性をさらに超えて一般化する必要性があると考えるところから「当事者性論」を構想中である。

- 21) 市場均衡論的功利主義の克服に向かって、改

めて合理性を問う (アマルティア・セン, 1989) ことは、ラッシュの「差異的合理性」と通じ合うものがあるし、福祉研究としては、市場社会で市場を超えることのできるものとしての贈与の研究 (モーリス・ゴドリエ, 1989) に学びつつ贈与論を追究する必要がある。また、コミュニティ以上のレベルの社会における共同性の問題は、コスモポリタニズムの主張 (ジョン・トムリンソン, 2000) とラッシュの文化的共同体を追究していく必要がある。

#### (参考文献)

- Ashmore, M. (1989) *The Reflexive Thesis: Wrighting Sociology of Scientific Knowledge*, The University of Chicago Press.
- Bauman, Z. (1991) *Modernity and Ambivalence*. Cambridge: Polity.
- ウルリヒ・ベック著、東廉／伊藤美登里訳 (1998)『危険社会—新しい近代への道—』法政大学出版局
- Beck, U., Giddens, A. and S. Lash (1994) *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Polity Press. = 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳 (1997)『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理—』而立書房
- Beck, U. (1999) *World Risk Society*, Polity Press.
- Bourdieu, P. et J-C. Passeron, (1970) *La reproduction; éléments pour une théorie du système d'enseignement*, Édition du Minuit. = 宮島喬訳 (1991)『再生産 (教育・社会・文化)』藤原書店
- Bourdieu, P. (1977) *Outline of a Theory of Practice*, Cambridge University Press.
- Bourdieu, P. (1979) *La distinction; critique sociale du jugement*. Les Éditions de Min-

- uit.=石井洋二郎訳 (1989/1990) 『ディスタ  
ンクシオン—社会的判断力批判—』Ⅰ／Ⅱ、藤  
原書店
- Bourdieu, P. (1980) *Le sens pratique*,  
Paris: Minuit.=今村仁司／港道隆共訳  
(1988) 『実践感覚』上、下、みすず書房
- Bourdieu, P. (1982) *Leçon sur le leçon*, Les  
Édition de Minuit
- Bourdieu, P. (1984) *Questions de sociologie*,  
Les Édition de Minuit.=田原音和監訳安田  
尚他訳 (1991) 『社会学の社会学』藤原書店
- Bourdieu, P. (1987) *Choses dites* Les Édition  
de Minuit.=石崎晴巳訳 (1988) 『構造と実践—  
ブルデュー自身によるブルデュー—』新評論
- ピエール・ブルデュー著、加藤晴久訳 (1990)  
『ピエール・ブルデュー—超領域の人間学—』  
藤原書店
- Bourdieu, P. & L. J. D. Wacquant (1992)  
*An Invitation to Reflexive Sociology*, The  
University of Chicago Press.
- Bourdieu, P. et al. (1993) *La misère du  
monde*, Éditions du Seuil.
- Bourdieu, P. (1996a) *Cotre-feux: Propos  
pour servir a la résistance contre  
l'invasion néo-libérale*, L'IBER-RAISONS  
D'AGIR.=加藤晴久訳 (2000) 『市場独裁主義  
批判』藤原書店
- Bourdieu, P. (1996b) *Sur la télévision: suivi  
de L'emprise du journalisme*, RAISONS  
D'AGIR Éditions.=櫻本陽一訳／解説  
(2000) 『メディア批判』藤原書店
- ピエール・ブルデュー著、紀葉子訳 (1999) 『『理  
解する』あるいは社会分析 (socio-analyse)  
とは何か?』東洋大学社会学部紀要, 第37—1  
号
- ブルデュー社会学研究会編 (1999) 『象徴的支配  
の社会学—ブルデューの認識と実践—』恒星社  
厚生閣
- Callinicos, A. (2001), *Against the Third  
Way*, Polity Press
- アラン・クロン著, 山田富秋・水川喜文訳  
(1996) 『入門エスノメソドロジー』せりか書房
- Garfinkel, H. (1967) *Studies in Ethnometho-  
dology*, Prentice Hall.
- ハロルド・ガーフィンケル他著, 山田富秋・好井  
裕明・山崎敬一訳 (1987) 『エスノメソドロジー—  
社会学的思考の解体—』せりか書房
- Garfinkel, H. & D. L. Wieder (1992) “Tow  
Incommensurable, Asymmetrically Alter-  
nate Technologies of Social Analysis”, in  
G. Watson & R. Seiler (eds.) *Text in Con-  
text; Contributions to Ethnomethodology*.  
Sage Publications, pp.175~206.
- Giddens, A. (1976) *New Rules of Sociologi-  
cal Method; A Positive Critique of Inter-  
pretative Sociologies*, Hutchinson.=松尾精  
文・藤井達也・小幡正敏訳 (1987) 『社会学の  
新しい方法基準—理解社会学の共感的批判—』  
而立書房
- Giddens, A. (1990) *The Consequences of  
Modernity*, Cambridge: Polity.=松尾精文・  
小幡正敏訳 (1993) 『近代とはいかなる時代か?—  
モダニティの帰結—』而立書房
- Giddens, A. (1994) *Beyod Left and Right:  
The Future of Radical Politics*, Polity  
Press
- Giddens, A. (1996) “Affluence, Poverty and  
the Idea of a Post-Scarcity Society” in *De-  
velopment and Change*, Vol.27, No 2
- Giddens, A. (1998) *The Third Way: The Re-  
newal of Social Democracy*, Polity Press.=  
佐和隆光訳 (1999) 『第三の道—効率と公正の  
新たな同盟—』日本経済新聞社
- Giddens, A. (2000) *The Third Way and its*

- Critics*. Polity Press
- Giddens, A. (ed.) (2001) *The Global Third Way Debate*, Polity Press.
- アンソニー・ギデنز／クリストファー・ピアソン著、松尾精文訳 (2001a) 『ギデنزとの対話—いまの時代を読み解く—』而立書房
- アンソニー・ギデنز著、佐和隆光訳 (2001b) 『暴走する世界—グローバリゼーションは何をどう変えるのか—』ダイヤモンド社
- モーリス・ゴドリエ著、山内昶訳 (1989) 『贈与の謎』法政大学出版局
- Gouldner, A. (1970) *The Coming Crisis of Western Sociology*, Basic Books.=岡田直之／田中義久訳 (1974～5) 『社会学の再生を求めて』1～3、新曜社
- 兼子一 (1995) 「ラディカル・リフレキシビティ再考—reflexivityをradicalかつreferentialにするとはどういうことか—」*Sociology Today* 第6号
- 兼子一 (1998a) 「社会調査におけるエスノメソドロジ的記述とは何か—実践的社会学推論とリフレキシビティの位置—」人文論叢 (大阪市立大学大学院文学研究科) 第26巻
- 兼子一 (1998b) 「リフレキシビティとエスノメソドロジーを実践すること」山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房
- 加藤晴久編集・構成／訳・解説 (2001) 『ピエール・ブルデュー米日記念講演2000—新しい社会運動 ネオ・リベラリズムと新しい支配形態—』藤原書店
- スコット・ラッシュ著、田中義久監訳 (1990)、『ポストモダン性の社会学』法政大学出版局
- Lash, S. (1993) "Reflexive Modernization: The Aesthetic Dimension" in *Theory, Culture & Society*, SAGE, London, Vol.10
- Lash, S. and J. Urry (1993) *Economies of Sign and Space*, London: Sage.
- Lash, S. (1999) *Another Modernity: A Different Rationality*, Blackwell.
- Lynch, M. (2000) "Against Reflexivity as an Academic Virtue and Source of Privileged Knowledge", *Theory, Culture & Society*, Vol.17 (3) 26～54
- 皆川満寿美 (1993) 『『無関与』の協同的達成』現代社会理論研究、第3号
- 皆川満寿美 (1997) 『障害としての文化』武蔵大学人文学雑誌、第29巻1, 2号
- 皆川満寿美 (1999) 「ラディカル・リフレキシビティとエスノメソドロジー」*ソシオロジスト* (武蔵大学) 1999-No.1
- 見田宗介 (1997) 『現代社会の理論』岩波書店
- O'Brien, M., Penna, S. and C. Hay (eds.) (1999) *Theorising Modernity: Reflexivity, Environment and Identity in Giddens' Social Theory*, Longman
- O'Neill, J. (1972 reprint 1991) *Sociology as a Skin Trade: Essays Towards a Reflexive Sociology*, Gregg Revivals
- Pollner, M. (1991) "Left of Ethnomethodology: The Rise and Decline of Radical Reflexivity", *American Sociological Review*, Vol.56 (June)
- アマルティア・セン著、大庭健・川本隆史訳 (1989) 『合理的な愚か者—経済学=倫理的探求—』勁草書房
- ジョン・トムリンソン著、片岡信訳 (2000) 『グローバリゼーション—文化帝国主義を超えて—』青土社
- 渡邊益男 (1996) 『生活の構造的把握の理論—新しい生活構造論の構築をめざして—』川島書店
- 渡邊益男 (1998a) 『『共苦』と『受苦者の連帯』の思想—福祉の思想史的根拠 (その1) —』明星大学社会学研究紀要第18号

渡邊益男 (1998b) 「福祉社会の贈与論的基盤—  
贈与と交換をめぐる理論と福祉における関係性  
把握—」 青井和夫・高橋徹・庄司興吉編『福祉  
社会の家族と共同意識—21世紀の市民社会と共  
同性：実践への指針—』 梓出版社

Woolgar, S. (ed.) (1988) *Knowledge and Re-  
flexivity: New Frontiers in the Sociology  
of Knowledge*, SAGE Publications.

山田富秋 (1998) 「ローカルでポリティカルな知

識を求めて」 山田富秋・好井裕明編『エスノメ  
ソドロロジーの想像力』 せりか書房

好井裕明 (1999) 『批判的エスノメソドロロジーの  
語り—差別の日常を読み解く—』 新曜社

全国自立生活センター協議会編 (2001) 『自立生  
活運動と障害文化—当事者からの福祉論—』 現  
代書館

(わたなべ ますお、本学科教授)

正 誤 表
-------

〔該当箇所〕			〔誤〕		〔正〕
3 ページ	右	2 0 行目	メビュウ	→	メビュウス
1 8 ページ	右	1 5 行目	<u>末</u> 消線	→	<u>抹</u> 消線
3 5 ページ	右	1 1 行目	<u>Tow</u>	→	<u>Two</u>